

小
精
雜
後

大正十三年五月上浣起筆

田

特別

14

1919

362



小抄雜識 四

大正十三年九月六日 起筆



○古山佩法の著書に「雪夜清話」一冊、赤穂義士の逸事と録あり、所載既後、其味を感ずるも、予をきくべし、今一二を物して談資に供す

一 瓊浦通に陸明齋と号する唐人、處て古海に海り日本詞を習ひ得、後より洋琉語を習ひ、其究へて帰国し、乍浦に居住せしに、薩州人難風に出逢ひ、唐しく漂着す、官舎に命せり

ふんを陸的齋とて西岸せしめ且唐船出帆
此の間日人等富をせしむ運多し陸的齋
馳走として日食の多物とて口を向きの料理
を振ふる夜に忠臣花の洋瑠璃をかたき
ゆをしとあり日本の洋瑠璃を異國に
出たるは一言漢より洋瑠璃の由をいふ
姓節と忠臣花とを賞するよし何れも忠
臣義士のこととてよく人を感動せしむる
故とせん

一 朱森の長崎へ来り日本の忠臣烈士のことを

ゆきを我四子かゝる人ある夷狄より奪え
まじと云りしを又朝鮮人對馬に居りし時
對馬人の小兒柱頭をうちつけ泣きしを
の人柱と云ふを北奴かと云ふんハ小兒注やみ
と朝鮮人語を日本ハ小兒を仇を執
ゆることを知らりと云りしを日本の風外四
を感動せしむることかくの如し四十七士の
勇を蘇れと云せしんすの勢歎め何うも
まきや

一 尾藩の人ハ見來葉記に又野彦の郎ハ從

母、松平兵部大輔吉品の内室に仕ふ、此内室ハ
京都日野家の息女なり、初より年に二歳故
浅井内近親の養ひに奉侍あり、或る時彦
八郎が従母向より女に問、内近親ハ御前
控へ如何なる御由侍ありとかく年々の御失
りあると云くとも御ありと云ふ云々詳かん
ず、又年経を廿多誇り出陣けん、其元
もんや年々一々勤しむるんハ包まむし
内近親控不慮の事をも切腹御家断絶
し御家中七千りく、さうし時、常守の思ひ

あしと深く隠し大石内蔵自ら以抱
し、京々登る金を蓄ふを添へ心の家
托し成人の後御家の姫君達と御し江戸
へ下り回主の嫁せめ、竊かに内近親殿の
香花ととりあふ抱ん比のや、まのい
家より嫁しめ、えい、と語りて、良
椎の山科に遊居せし、さか、日野家を
不こそし、かと彦彦八郎さくりと、一
と云ふべし、彦彦八郎は、
徳川一門の世子、
一我義公の常山文集に、鶴、
林、
註、
地州

一 諸士復讐の時吉良氏七一兵を切ると大鏡を用
 言せば、四十餘人の一考として慶應のちんと云況乎
 山行義が鈴林危言に見ゆ、これ兵家の癖と
 みゆんとも僻論もあるものなり、**黄多仲**が
 深延尉の詩の轉句に楠公の子を云ふ、七結
 束に金剛恨不使君攻と云向あり、これ極好
 として忠臣をせめたるべきといひ、**飯**りの無後
 ころ、平山の夜と田の夜と云ふべし

一 大石の畫は出て見ゆ、**畫**林丹竹在田 **蝶** **義**
 墨竹 **報** **述** **謝** **の** **平** 詰 **物** **也** **其** **他** **の** **白** **書** **後** **自**

畫杯より將木鶏か、**羽** **羽** **平** **の** **畫** **二** **題** **也**
 和歌に、濁り江のしごりにあひひをまも
 るとかハセ女のとうむおくへきし といふ
 大石の心を言し得ると云へし

○前月末長崎にレ、ホルトの海軍万々年記念会が
 あつて、多の折を接し、**田** **市** **波** **の** **大** **名** **を** **日** **地** **に** **開** **い** **江**
 が自令の缺席に、**比** **念** **今** **あ** **ら** **ハ** **印** **刷** **物** **を** **寄** **り** **て** **是**
 ころ、諸家がレ、ホルトニ関して述べた後、**一** **庄** **後**
 んに又、自令も前年古物と指え、**比** **折** **可** **ら** **う** **城** **人** **の**
 事蹟を詢して見ることがあるといふ、**比** **格** **外** **諸** **家** **の**

況と新くし味を感しよるか、レールトの東上旅行
日記中にあるものも、聊か録して置きたいことであ
る。その八重七は、島津摩中津二侯の阿蘇院政
味に關し、ある。此の東上日誌は一千八百二十六年
即ち我文政九年の記で、江戸迄かく大森に着いたの
は四月十日であるが、島津中津二侯との合見は此時
から初めまうと、江戸滞在中は二侯をめぐりて記して
ある。薩摩侯の島津重豪中津侯の奥平昌
高である。此等の日誌は、吳秀三村上直次郎二侯士
に依る譯である。其の醫術をまじり、村上の交友を

まとしてあるは、互ひに記す。詳略のおもいがある。
と、其の詳しき方、據りつて抄出さす。

四月十日の記

大森村より薩摩侯と中津侯とが江戸から
へ、是れを彼等の身分その他の事柄に依り得
るなかに、余等を初る機会を見出す為め
待受けを命じ、此の高貴なオランダ人の保護
者、使節が通常休憩し、此の統帥を告ぐ。余等
は暫く前堂に待たれ、後、搦見の茶を得た。あ
るは、若き薩摩侯の公子とて、此の茶を深杯を

此に余等が揃し、余等が口布風に敬禮をこし、
其間に室の運の腰掛に坐させ、病も多
く治すのは八十四歳の友人藤原(延喜二
年七十四年)中(年八十三)に及及ハ完全の用
を有し強健な体格をおつておれり、精々六十
五歳と見え、彼の写し、彼ハ時々蘭語を
い、又其目に着いた品物の名を尋ね、使即その
漢語が終りて、余の方を向き、名を呼ん、彼は
動物及び天然産物の大なる友、西遊歎及
鳥の剥製法と昆虫の保存法を習ひ、



云つと、余ハ老人に之に存すると云く、彼ハ次に
最近丹毒三羅への石の手をえせ、まゝに用いた所
此ハ丹鉛軟膏が塗つてあつたが、余ハ其膏を在
此侍醫の感傷をよまぬ、其に因る、彼は是れぬ
ことを没し、是れある薬剤を認め、最初の検査
此之を贈る約束を志し、余が此の親友あり、友人の
ル日本風な坐つておれ、時に中津炭は余が手を
取つて、ぬき、次の蘭語を述べ、
ドクトル、シーボルト、イク、ダニク、ユ、
オントフ、アングネ、ブリー、アエン、
エン、ハスヘンケン

(ドリットン、シーボルトより、私の方へお出で下さい、私ハ千紙
と贈物を受け取つた。御礼を貴方へ申します) 彼は
次に其通譯を介して名士の話をし、余が懐中時
器に付いて尋ね、余ハ肩章を換へ、其意義を
問ふ所の、階級の章であると言へば、余が帯鈕
の資格あることを彼等知らしむる様入るを
人々の特に剣帯を着けておれば、彼が奴隷心を
以て其意義を尋ね、侍であるが、余が剣帯は、
國王陛下の爲め常に剣を帯せねばならぬことを起
起す方であると言へば、此間に大官の前へ金平

精及び菓子を出し、而後話の間に金孝が江戸
滞在中の微のむ訪問を、約束がなつて
余等の辞去した。

四月十一日江戸着の記事の中に云く

江戸幕府の侍 ● 留其他和蘭堂渡者ハ一行を品
川まで迎へて刺をせし、御者所衆ハ之を入らず、其
名刺のみを通せり、是ハ桂川南賢(魏字 *Mil*
-Julmus Potamicus) 中津侯の侍 *ピエテル・フ*
ンデル・ストルプ *Pieter van der Stulp* 奥平の大
夫(大膳大夫)の士官上谷源内、商人ハ *ドリットク・ファン*

ギエゴロン Handric von Gulphim 醫の大槻玄潭が

と多く、和蘭語を法し又ハ少今、江戸に勤番
の通詞サイロウ(馬場祐十郎)七世を引連れ來
る奉行と外四奉行が使節一行の到着の報に接し
祝詞を述べたことが使節(通)にえ、又中津
侯ハ又刻々訪する當通しとの、政体の款待の
準備を、此、彼ハ三十年來友と、此オランダ人ハ一
度挨拶して打ち識りといひ、其職を退い、此と云ふ
ことある、さう一あけ、ハ、四守に法し、我等と親
くすることか出来、余等ハ此友と今、打ち解け

紀事と満進と此友を、此侍臣、ピーテルファンデル
ストルプ、侯の病人と、皇宮の重宝を、此、道名ア
ニギエル、君並に従者、ケートは皆、此、好く
其役を勤め、余ハ使節、向心、此、一生の中、此、
前、七高、校る、此、別、此、佛、此、身、此、す、と
を禁し、得る、此、身、此、視、此、オランダ、此、打、入
ん、此、或、此、五、此、我、等、と、片、言、の、蘭、語、が、此、説、す、果
人、此、笑、す、此、飽、食、し、此、侍、臣、此、注、意、深、い、下、堂、に、此、法、此、
を、此、丸、坊、主、の、頭、を、此、刺、し、此、此、此、此、此、此、此、
此、ファン、ギエル、ヘン、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、

真面目の炭の一圖と、百年前の武の窮屈な服装
の女側とをのぞく余等も、此等、怪しい蘭語に
熟練する従者が君侯の指導者となりてゐる。此等
景の氣も滑稽の感を感じてゐるものがある。法
か、それか、炭の余等の部をにまじり、其の氣も滑稽
書は餘等を味列し、歐洲の術の協助者として保
護者を歓迎する設けがあらう。此君を最も喜
ハセルのは余が、ロヤノフォルテと測時器、顕微鏡
其他の器械がある。此の炭の改を考へ、之を知り、種
々の時計を考へ、余等を敬むかせた。其の余等が

最し五人のい教を學ぶと、進法心ゆゑ、金屬の振子
を附し、又、其の時等を具く、此の炭の炭は、彼へ其
前に使はるる物を飲料を巧く、口より、深更に取つて、
つた。

四月十日。

朝霧摩炭から浮山の妙物を多けた。織物生馬
植物等、日本風味に似る。最も美しく、教へてある。
又、刻中津炭が今も、徹行するを、夜半に、まひりた。
余等、彼を歓迎する。其の好力し、音の楽、器、及
ひ、多の、器、の、官、の、我、等、も、心、から、樂、し、ん、ん、吹、風、の

舞踏に對して彼の批評は獨特なるものか、次の言ひ
日本のと比較して、オランダ人は是を以て踊るは日本
人の之を及しずを以てしや。

四月十五日の記に、あるは正式の儀の多あり、婦人の診
察をも拘はん事と見え

夕中津及び薩摩の領主の盛儀を備へ、以て
あり、美藝なる娯物を受飲し、炭茶の夕の
大部分を余等の許に渡し、音楽唱歌者之類無
械等を、主人は、夫等の余が娯物及醫術等の
門生中に彼を加へんことを望み、最上危險を

日本の病氣に對する治療法、其の簡便を編
纂せられたることを、彼の以て彼の書を持参し、
が、余の即ちこれ、其の之を、刺製し、以て、
大いに喜んじ、余の、あるは、主流を娯物を、
彼等の感謝し、之を受ければ、志願の、
當つて、皇帝の將軍と、から、物り、自用の、
を、余の、あるは、前、余の、診察を受ければ、
今、情を、向ふは、志願の、側室等を、口は、中、
將軍の、夫人の、母、あつた、余等、歐海の、愛
嬌を、おし、之を、款待し、余の、此、婦人、中、

分高き者の一人から右胸の硬結を断るに
求めらるる光榮を得た、之を露出せし診察
させることを躊躇し、**醫術**として**歐洲**の
模倣に依り診察する許可を求めた、此一團
ハ日本の大官の意するべき家庭に、**四女**ハ此
彼の最善の所を我等に示し、**礼儀**正しく
威厳あり、**洋**如き白心あり、**七**誇る振ふるべき
教養あり、**白髪**の強健な疾も子に七認めえ
品も教養あり、**歐洲**人の尊敬するべき**性格**を
備けておれ、

お戻とレーボルトの姓復ハ尚ほ江戸滞在中、**背**以上の
もあつたが、**重**なるに以上の如くある、**レーボルト**が
江戸を去りて、**長崎**に向つたのを**五月**の十八日、**此**
数日間、**多く**の日本の阿茶院の書に、**今**し彼我
を交復することあり、**さ**らうに、**彼**んは、**最**上
徳内から、**鎌**東撰太の地圖を内示せん、**亦**鎌東撰を
編次し、**代**の、**各**種症の設法を、**さ**るべきこと
眼科の試験を、**い**ち、**彼**んは、**高**徳心左衛門
七、**今**し、**方**疊々、**地**圖を見、**亦**其、**東**撰家ハ、**七**
江戸に、**レーボルト**を、**引**寄せ、**互**あんと、**甚**心、**七**終

目的を成せしむし、日誌やりのと幕府の侍醫レールボ
ルトの長く江戸に居ることゝ抗議を提し、江戸を
引しあう。

五月六日記

島津頼豪侯がレールボルトと親交ありしこと、以
上の如し、而して其の系統ハ引つて終に福宮藩を
レ及びこん又レールボルトと繋ぐる継来し其の藩
主を引つて歸る島津の事と通し行人あり、
明治の八年、宮附金を募り長崎にレールボルトの
記念塔を建てる時、推せん人等とて、島津重豪侯
宮田藩主、里田長濤侯、北人の今の長尾侯

の祖父に當る人、島津家とて美ら子とて、福宮
藩に未だ人び、又定^交、即ち島津重豪侯
より、長濤侯の養父ハ、齊清侯を被仰る
を好まんレールボルトの来崎を喜び、おりの討
論せんたり、長濤侯も亦おのレールボルトを
おのれとて、おりのとて、え来福宮藩ハ、何賀満
とて、臨年、長崎の整へ、南つて、おのレールボルトと
おのれと、おの縁が深く、レールボルトとおの交ハ
おのれと、おの縁が深く、おのレールボルトとおの交ハ
おのれと、おの縁が深く、おのレールボルトとおの交ハ
おのれと、おの縁が深く、おのレールボルトとおの交ハ

長傳侯の養父齊治侯が斯う執味をみし且
の深かつたこと、里田世清の齊治侯^の中^のたの如く
あつたもの如し

長崎の靈衛に洋心を用ひ、唐く洋人の
い多く洋書を購入し、某人ドウフ及びシーボルト
と姑の教人と見し、情状を問様ふ、一聞
には草木木や禽を愛し、本草の字を嗜み、
夢的なるものあはれ、草記と月々^の娛む、中身
のを貸いひ、いふも、一異名草木を贈る者
あはれ、手と以て枝葉を摸書し香臭

をかきて其名を指す、一七違ふ書あり、
種を其とす者も数あり

侯のあつた同好者の間、人樂善むのれを
以ておとえん人がある、又シーボルトと此道
の間、是れ就し、筑前の其某の者、安部龍
の著記、下問雜載とす、行をがら、此書
見て、えんとかひ、元禽の、うゑ、あつてハシーボルト
ト恐れ、君侯に及はつること、著々と録してある
此の字本の福島園生被三花しある由

シーボルトの再の度、渡其の、既と多くの門人もあつて

各所に散在しぬれば、まゝに多くは、敵國者び、手おけて流し海
たる病人を伴ふべし。シールトニ、流産をせよと、日誌に據る
と、し七まゝの、胎盤、煩い、と云はれ、扱あひあふが、病人に對
する義理、あつても、まゝに、休くして、何れも、診察を施し、二人
花を持てる為め、病者に對して、心あはせよと、言ふも、言つれば
と、若し、おと方い、こゝろ、亦、病人に、ドクトル、免状を、出さ
し、と、まゝと、あつても、多分、お、回、成、ぬ、の時、二人に
課し、論文、二、點、し、七、ん、と、出、す、と、云、く、る、論、文、の、題、
ま、か、か、呼、ぶ、け、し、ま、る、。

シールトの最初長めに、来た時、毒を置いた其毒



の素性、の、き、母、孫、と、ある、山、脇、タ、カ、の、許、の、家、に、據、り、と
祖母、即ち、この、毒、と、ま、る、は、女、の、楠、本、姓、に、長、岡、生、ん、の、始祖
ハ、高、山、の、人、に、あ、つ、た、と、云、ふ、此、女、の、名、を、タ、キ、と、ま、り、て、流
産、危、重、の、向、と、ま、る、即、ち、高、山、服、部、危、と、い、ふ、事、見、ら、る、
い、ま、あ、つ、け、て、あ、つ、た、の、事、最、初、南、東、人、が、見、て、毒、を、置、し
た、後、この、毒、が、見、て、所、望、と、い、ふ、は、佐、向、堀、川、を、と、り、し、
又、帰、り、た、が、あ、つ、た、楊、婦、と、あ、つ、た、は、外、人、の、毒、と、ま、る、こ
と、か、出、来、ら、う、と、い、ふ、丸、山、の、ロ、ゲ、タ、屋、左、月、に、後、う、た
籍、を、置、き、織、婦、奴、と、ま、る、と、シ、方、に、行、き、こ、る、と、い、ふ、事、
真、の、楊、婦、と、あ、つ、た、の、事、北、婦、人、に、生、ん、た、子、が、女、子

びイ子と稱し醫術を其よりし。柔術の心得があつて加賀藩
士の無状を制せんとして、其の隠し氣をいかに出して屈伏
せしめたること七あると

(五月七日録)

○大隈侯の傳記附録に侯家にてある名家の詞を
アルバムに製したる者行かんことを企て、其の擔任を
高田房の故本嘉治馬に托し、故本より著美を以て
其の詞を托し、其結果、今日大隈別邸に關係者
打揃に現物に就て一巻の海濱を著せんとし、余も
中絶せし。臨む、去年アルバムに編入のためにと送
又置きたる此詞の數をいふに約百通あり、此の

通のありは長短さまざまも概ん長文多く

且つ一家五六通あり、亦漏らさず可らざるもの
百通の内に入りたるものも、さるアルバムは或
通を収め得るやと云ふに、大体大きさは新装紙四
つ切程の横帳を一面摺り約百二十頁乃至百
十頁、可成り百二十頁を限度とし、一頁に
二尺二寸のもの二段に入り、とりて百二十頁ある
もの三十八尺の者詞を納め得べし、検出する
百通の長さの尺とさるや、未だ油書とせえ
とも、多分は全部収め難からん、その尺を計り

ハ近日今令の時、譲りたるが、肝要の書簡を二
二回以上七あるものへ、まゝに限り三段に組み且つ
折込し、可成一目見通しの出来、換入するに
長短の拘排を、餘地を、剩す、換入する
もの人、物を、候、順序を、主、結ぶ、目録面、
錯綜の故を、定、す、長短の排合を、する、こと、
し、じ、み、か、り、尚、は、亦、嘗、て、報、知、社、の、為、め、
千の書簡を、選、み、出、し、同、社、と、ま、え、を、一、巻、に
印、刷、せ、し、こ、と、あ、り、今、方、の、見、本、も、可、成、他
の、し、よ、を、取、つ、方、針、ま、り、も、宮、家、の、書、簡、の、如、き、

他、と、無、き、が、如、に、彼、ん、を、并、ひ、取、つ、こ、と、亦、じ、
と、あ、り、お、よ、そ、此、等、の、書、簡、を、全、部、方、向、に、換、り
り、ま、り、其、の、を、あ、ら、ま、か、と、引、く、し、に、少、く、も、七、百
荒、く、十、回、間、を、あ、ま、し、と、云、へ、り、未、だ、十、回、中、
と、共、に、再、検、又、尺、度、を、測、る、勢、也、(五月八日記)
○石油時報に連載の余の逸業十五回を、重、ぬ、
日、内、山、者、三、来、ふ、又、二、回、分、の、改、活、を、筆、録、す、
其、目、左、の、如、し

一 河内山宗俊

鈴木白存の記に、あ、り、ん、宗、俊、の

服紫風采、**寛永**字後の遺世

壽と系料、**現**を幼むしこと

貴族のフランク教味

シールントの東上日橋、**現**を

薩摩中津ニ差、**并**ニ黒田居

一 紋十郎の妙投

依名、**恒**魯又と紋十郎の、**紋**

十の投を、**親**の志感

一 洋一 と系字の、

一 支那人の淨瑠璃

一 大槌盤、**舟**進遠合の事

一 雅名ニ、**合**を消枕る

一 寺、**大**茂の、**因**を、**附**撲、**揆**店

一 花の、**ロ**ーマンス

右を、**後**流、**草**を、**一**め、**三**め、**万**を、**舞**す、**左**の、**教**

目、**八**時間、**ろ**く、**次**回、**入**流、**り**り

一 七、**中**、**七**所

ヤ、**町**女、**あ**ら、**か**の、**夜**、**一**夜、**二**所

の、**心**土、**近**、**江**、**の**、**号**、**一**、**癩**、**病**、**血**、**統**

多く、**為**の、**嫁**、**する**、**流**、**の**、**事**、**一**

● 夜這星

西洋のモロエロスの

乳あふこと

● 寺ハ昔時故味の府

● 赤穂義士達

大石が清の屋の世をひきつる京

都の日記家：托し、その世を

大名に縁づけしこと

● 一休禪師

戒律の人間の性：及する：横切

し本能主義をわづらひしこと

狂言集と喜喜集と流行のこ

とあるを例とす

● 中崎松原、寺母名海屋の節を焼

かんとす

● 飛行機志願者の平直なる告白

陸軍省に三萬圓を得て航の為

に三萬圓の現代の廿四孝の内二枚

● 船方徳次郎

● 人間の四所

北八坂の復活の次きの二回令に充るを得し(五月)

十一日記

○昨午後より大隈列館に到りアルバムに収めべき書簡の再調を爲す。その取らべき書簡を一寸寸尺を取らば、目録に記入す。アルバムに入ん得べき書簡の尺は四方八十尺なり。但しアルバムの紙数百二十頁とし七の尺より百五十頁とすべし。六百尺なり。此年の某月アルバムに入るべきものとして検出し得るもの百通あり。多分これより充分なるん。殆どせん。全部入り難かんと期せしよ。尺を取らば見れば二百尺餘り過ぎき。案外に容積の大ききものありき。更らるる方面に降り

収めべき書簡を検索し約百通を得。前の百通と併せて百五十餘家を総羅し未だ四カ八十尺に充てず。尚ほ三四十家を収めべき餘地あるを各人別を以て見れば凡そ備はるるを要す。又ハ収の多し。此上収めべきハ傳記と関係ある書簡も多し。但し最初直接傳記と関係ある資料書簡ハ本傳中に入るべき餘地を以てハ本傳の餘地を以て紙数甚しく増加してその収め今ハ之れを挿入し難く。言々資料の一切アルバムに入る。を便とすることをおぼしめ。此の北方針。今本傳やに入るべきを取らざるものありき。尚ほ北方面のものを

重し取入るとせば、アルバムも蓋を意義ある附録と
せん、アルバムの毎頁にハニ尺餘のものを二段に組
入るゝことを通則と定めんば、出簡の古尺なる
ものハ業者の地位高き人例ハ木戸公の如きものと
長三段にすすことを也、これを得ずと為す高は地
位下の人の長簡なるものと長七三段にすすを可
とす、此のガツト取油心なるを、極心ハ三段の大き
とす、あつと可きものハ五六家あり、三段に縮める
大容積を場すハ言ふに可し、其の重物を補充
の可捨案とす、餘金もろろが或許を加へ得べきか

前金とあつて、アルバムの蓋の者ハ前散供七圓かとし、
可成ハ大切なるものハ此アルバムに漏らさず、収めつべき
此アルバムは名家の遺墨、拙筆の文、すなはち、
明治史の根本資料、且、皆大切なる原書なり、中
のハ、其の勤切を誇るゝもの、其の寛を重く、其の
性格を現はすもの、其の多く、殊に、維新大政の推移
を語る一處に、あつて、其の流きたる資料なり、既述に
於て、斯の豊富なり、材料を編成し、其のあり、其の定
に、其の偽記、不なる光彩を添へ、其のあり、後世の治
史を編するもの、為の、裨益を興つる、難し、其のあり

と云ふ余の努力して此の附録の美をうせんことを期す。更に凡例を書くことにもせん。今案しする二三を録し其折の用に供せんとする。

一 此アルバムに取入らんは 一通に在

一 家之涉る姓に一家十通も取らんは

一 長簡を収めるにアルバムの不便とする所見えとも内容重要なるものにつとめて長簡とて取り入るゝことせり。木三戸伊藤二公の書簡のことき二簡以上なるは長簡あり

一 多く一家一二通を取ると例としてせんも緊

+

要するもの破格に一家十通も取らんは
一 傳記の巻端に記すも書簡に及ぶべく取らんは

一 他人に及ぶ書簡とて記すの是に關係あるものも若干取らんは伊藤宗城の書簡のこときこれ也

一 多く傳いらざる人の書簡例に親を家のことき其由を問はず取らんは

一 現存の人と書も是に重大の關係あるは取らんは

- 一 四年報社社の記念出版に公刊した書
- 一 同中四五七五のよと取り入れたる
- 一 名の著つてゐる人の者前を差に開し重大の記多あるもの取り入れたる花格鞍靴の由の同のこときいん
- 一 人の名答を換するもの物氏ある書同の其家の考めを忘めて取り入れたる
- 一 文學工藝の家の考同の物と四家を要のついで関係あるもの元入れたる鑄金家行を夏雄の書同の如きことん

- 一 外人の書同の考めを割愛したる
- 一 北アム中し瀬くもの西国寺桂寺内大山出児島惟通等より比等の人の書同の備のらすんを瀬くの書成るるを是れ也

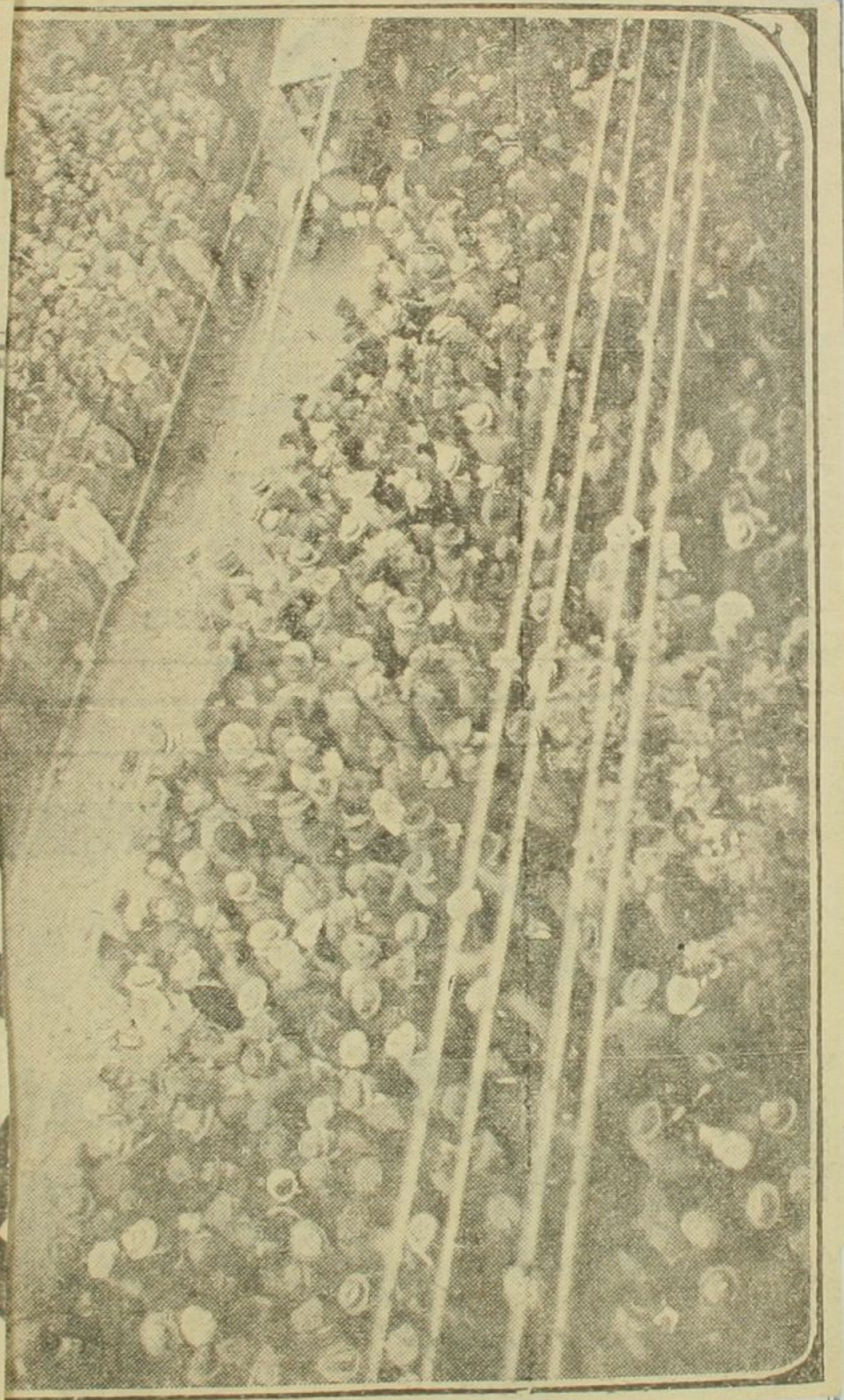
九月十三日記

○清浦内閣の解散後七十日を経て後選定の結果如何と見ると内閣が其党政本黨が才一党を以てし幼しき考より才一党の憲政黨に歸しつゝ臨時運の死しちる所と云ふを得し、いつて政府の

此の黨が味をとらざるは従来の例ならず其の黨に便利多
きかたより、今回とて其の間の干渉を其の行ふに其
の黨に便し敵を妨げざるは其の所望の可なり形勢
各所を占む、而して政府の黨にまててし、何んが是
の勢あり、但し政府の真の黨は一夜休みの政黨となり、
彼令政友会を分離し、その地方に地盤を固
めるといふは、一黨二つを合して互に争ふに指し、あ
るの不利を、妨げのあり、逸又の利となり、勿論
憲政黨の利を帰し、之れ必故ありと果し、公権
を濫用して其の援助し、其の黨が憲政黨となり

数に於て是れ少なきは、分離せる政友会が未だ地盤
を鞏固し、選ばる、早く選ばる、主たる者めといふ
は、腑中交る事と謂はるを得ぬ、木村氏の政敵の
如き政府が全力を集中する所也、田子にあり、便利
り、其の言ふは、而して終に敗れ、此一事以て
他を類推するを得べく、内閣の鼎の軽重は、これ
依つて定まる、政府の大方痛手は、尤も此区の一
日ありし、何んといふは、政友会の徳義高橋を収り
得ば、其の勢を以て、十五二十の中、其の激るを
して自党に加く得べき、容易の事なりし也、是

政府が高橋を倒すに力を剩すといひしは此故ありし
 ハ云ふ迄も、而して終に目的を達する能はざらんしハ何
 んぞ、その勢に帰する所以、茲に返する也、ひとり甲の破
 れざるを、政府も主として、多くの官吏ハ概ね
 彼らなり、本黨の領袖中橋を始、他の知名の人の落選
 せる數ハ本黨に於て尤も多きハ、是れ國民の政治知識
 の漸ゆく場也、満洲為政に飽きたる大勢の如
 く、ある所と云ふの外、今日次の選考ハ實
 ゝ混濁を極め、候補者の數ハ従前例を見ざる
 不、比、各區三ツ色の競状を呈し、さういふ、後前

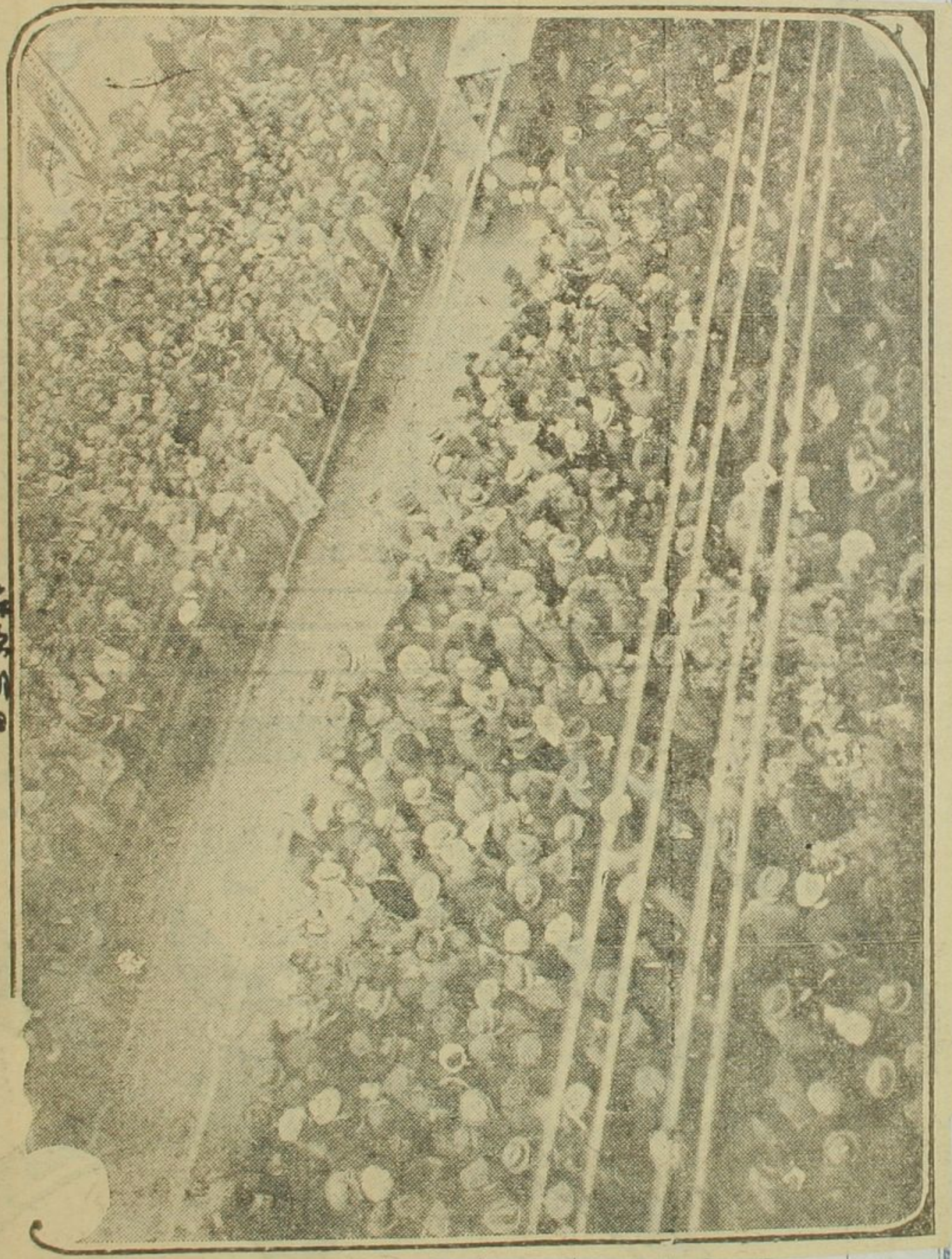


の副作用を有せず、又
 家の投薬に最も便宜な
 本進呈
 八十錢 六箱入 十五圓

X光線わきか
 若返り法 醫師
 若返り希望者は、同時申込を受く
 院長 山尾清
 駿河臺ニコソイ堂東部●電車

大

政府が高橋を倒すの力を剩すといひしは故にあり
 ハ云ふは七あり、而して終に目的を達する能はざらんしハ何
 んぞ、その勢に帰する所以、茲に返する也、いさう申す破
 れざるをいさうか、政府も主として多くの友吏ハ板好
 ぬらん、本堂の領袖中橋を始の他の親友の人の落選
 せる数ハ本堂に於て尤も多きは、是れ國民の政治親後
 の漸ゆく場也、満洲為政に飽きたる大勢の如
 くとある所と云ふの外、今更ん、今日次の選考ハ其
 り浪流を扱ぬらん、候補者の数ハ従前例を足る
 不む、各區三ツ色の戦状を呈し、今更ん、後前よ



護憲派の大群衆當選に拍手する

は自前車の通路一條をあけて圖の如き大群衆が熱心に報告を待ち、夜十一時を過ぐるも去らず護憲派の當選を見ることに拍手と喊呼でこれ
 を迎へ、意氣既に現内閣を呑むの態があつた、交通調査員數名は中央の車道を閉くべく終日奮力してゐたが、これまたニコニコと護憲派の當
 選を迎へてゐた

リ有かるる一黨加へりたるが故あり、皮想の解を下すべ
ハ護憲聯合の力、政府黨を壓し、とうと有るべし。三派
の聯合ハ表面の沙汰を以、聯合ハるる實、地方に行われ、
同志打ハれる處、行ハれ、憲政黨の苦戦ハ強ク、前
例を見ざる事、いさう、結果するとの政友會が其の地盤を
を守るは、見、本黨を焚くを口實に、席を候補を立て、
この別ハ、實に多く、これらを見、護憲の味方を妨る
ト云ふこと、政府の干渉も大なりし事實を認め、
る可とも、若し護憲の提振する事、行われ、
ハ政府黨の當選数を半減し、得るべし。

とす、護憲派の當選数●を少くしとせん、その同志打
の結果と云ふの外、保し、保る分、及り、選挙
ハ可きの教訓を國民に與へ、國民ハ、その政府
の干渉あることを仰し、而して官警を對してハ私警を
を以て當り、其不當の即時法衛に訴へ、以て、敬告警察の報
ある事、見るに、憲兵の力を仰く事、能く、厭上、
こ場、械宣の位置に出、今次の選挙の紛糾
を極める事、是ハ、國民を訓練し、掩外可とする
事實とす、若し、見るに、選挙事、犯者を生し、
一事ハ、多くハ政府黨と政友會あり、憲政黨

と禁つゝるの観あり、元廢收改定の本色の暴落
しつゝあるも、此等の状況が●却つて自らを福し望
意改定に譲りたるものも善し解かざる、元七亦四
民を取つその一大教訓と謂つゝ可なり

選挙の結果

憲政 一五五

華新 三〇

本堂 一二四

實田 八

政友 一〇四

無傍 五

憲政候補の向ふは、知人甚だ多く、改定のおよぶにつ
て、近年の如く、選挙の多き、持てるべき、自今も流る

氣が標め、開票数〇前も、頭を悩まし、多別
して、御玉の考案中、義理ある友人の、
元七苦戦の、状態を、つゝ、結果、
を、元七、元七、元七、元七、元七、
外、元七、元七、元七、元七、元七、
全体、元七、元七、元七、元七、元七、
元七、元七、元七、元七、元七、元七、
果を得たり

五月十四日記

〇野村の閉を得て、決、付、て、東洋キ子マの映
画を見、四、時、台、世、を、忘、る、映、画、の、内、容、も、雄、大、る

る。Birth of Nation. 米四南北部多の動機と其の
戦闘、割布に於てリンドン大統領の暗殺、以糖解
放の結果里人の改定、里人大多数を占め米四南
部の戦争の光景、里人間に於ける白人と其里人多受
ける凌辱、里人征伐其效を奏したる事等が
或るべき重要な場面なり。此間に男世の物交を
點綴すること例に依り尚のことし、えを先づ
感し得るあるの風俗なり、ある南北風俗に於て若
しき差あり、北部ハ南部の風俗を以て冷然するを
し服装ハ、ズボマ、ズボマ、其の冷然例より北部の風

俗ありと見るに、今日の合衆國人の多くは、其の差あり
男子に於てハ概して大きき重きもの襟飾をつけ、
千日のきには左右の側に多くの飾りボタンを縫列し
外套の後ろは二重襟に、一重の短かき、延んたる
のこきよ、下つて二重の格好をとり、ツボンは
大くダブつき、靴は、ズボマ、大政決集か馬車
を以て静養の出かける服装を見れば、外套の上に
裏を覆するもの、レヨールを纏へ居り、婦人の
服は袴ハ、いづく廣がり、甚に美しく、帽子も、
飾る氣の利かぬ形なり、此等の装束の風俗を見る

いつかと思ひ起すの我邦初物の欧風を嘗てハ
我邦も亦嘗て男子がレヨールを白晝に伊達と稱
綴りしこともあり、**二重トング**は嘗て我馬車の
駁者、用ひえしことあり、千三ツキの左衣に多く
ボタンのあるもの一時流行し、**錦襟**に重くしき
絹や縮緬などの襟結ひ等の用ひえしことあり
リ、此等の服装は流石に今に傳へて田舎紳士と
稱せし之を見れば一矢を禁せざる程に變遷し、**足尾**
米田のあめい亮から日本欧化の初と酷似し、**足尾**
等として日本歐化の本家ハアメリカなることを

痛切な感をもめり、今日外人ハ日本の欧風模擬の不
徹底を笑へる、彼等ハ湘州の本玉の四時を考へ
バ、我々我々^(我々)笑を自家の祖先代に移せしむる
得ざるべし、**米田**あめの服装其のまじりなく今
我田紳のまじりと甲乙するきを見れば一塚をみることを
得ざるし、**歐風**開放に就て、確に理論の實に
表現が過激なりし為め、一時弊を生し、**女**の
も、權利を獲得し、**女**に對する里奴ハ義務を感す
この能力も教育もよく、**女**に對する里奴ハ義務を感す
扱ハ、恰も現時吾人の心算が、**女**の煽動

に依り地主資本家に反抗するも同様の親愛を彼に
返すに七理論の考慮なきは実施を悔ひつと回
しく吾人に於て七復讐を思ひたる可とせざるはあ
里奴が遂に多敷を占めんとし白人を迫るを
之景、やんハ里奴多敷を占めざる遂に、**米**の行
状の**舟**も監禁する、**米**之れを又ハ新主義社
合主義我々の實現の日ハ同一の光景を繰返す人こ
と名考するも、**流**米人ハ里奴解放の結果ハハ
社閉ルし然んば里奴を人として何んを其の苛
代ハ里奴ハ苦みの経験を嘗みたる其の傳統の

嫌悪に依るなりと云んや吾んハ米人の此等日本人
排斥の努力の事ハ事ハ此感に禁し得
たり也、表し吾ん時教を以つて米洋の特色と云
ふ如きも固く致し米と於て七行はなすこと一再
りし米而して其例ハリンコルに在り、多く母奴隷を使
役し利を得たりとも一朝之れを失ふと於て私憤の甚
時教と多量の酒者ハ米西と米同飲地、**東洋**のみを
笑ハ**米**、**米**の情をこ絶ハ、**里**山喜氣お投すハ
危難の河ハ在りて七抱擁接吻して傍ら人のあるを
憚らぬ、彼等の習慣するを怪まさんとも、冷静に

梅子ハ潤房中の行事を公刊するに似たり。日本に於
て婦人の肌膚をあらすの圖々々危る傳と稱し或
る程度を起え濃厚なる場合ハ公刊を禁するに
抱擁接吻ハ危る傳を起す所ハ春畫の域に入る
このまう、彼人の風を我々と異らうといふハ、
日清以来ハ一笑を禁し得ざる世春畫に危る果
が之らも危るハおかしきものと感ぜざる能はず、危
し邦人抱擁接吻の傳を起す事あるものあるを、
ハ日本人の恥を以て禁し得ざるや、外人の映画
の之を許し得るもの、之を禁する事あるハ時代錯誤
の誤



の論ハ恐らく沸騰せん、偶々両宗を御：依くす漫
リに筆を走らす
五月十五。

の編纂者後の政局ハ如何なるか、政府が解散
の他り其の信任を国民の間なる結果、政府重なる
敗れざるまじハ辭するの外なきハ言ふ事あり、之ハ
現代ハキチの護憲三派あり、こと亦尚然らんハ
北亦此の推後と妨害し、今者夏則ハ閣を更えりて
あるもの貴族院や官僚日多し、恐らく今回ハ事
柄之れを許さざればし、概ハ護憲三派内閣は
織の大命を拜すとすんハ、聯合内閣を組織す

や否や三派の連合を政府黨と選定する場を斡旋すを
目的とし、今も、但閣に就くの申合ありとい言
ひ三派の白旗に改定革新二派を聯立を主張
せん比較多数を得し第一黨の地位を占めざる意
政黨七情壇上提携を辭し、あつたる異縁を
と由來我邦に於て聯立内閣の事切を存せし
こと嘗て既往ありし、いつも内を沈めざるに
かゝるも、此の意、蒲博の問、起り、短命の
に終らざるあり、その如くつたることを保てす
不と思案ハあるまじ、若し真に渡急急の實と

卷けんとせば、第一黨に由り各派を任せる、二派は
閣外に在りて援助する、或んば其の名義を
二派と之れを即ちも野黨とし、かゝるとんば、正
す、心聯立内閣が、内訌を及ぶ此種の内閣を支持
するハ大困難なる、かくて貴族院に於てハ、渡急
派と敵とする多数固あり、政府の前途決して坦々
ならず、若し聯立内閣を組織するに已むを得ずと
せん、貴族院に對抗し、其荆棘を刈くを主要
目的とし、是が為め、法會せざる可からず、今の急
此意に及する貴族院の階級的勢力を打破す

之れは其遺児を、加藤の事を托せん、
 疎略に附して可らんや、
 此の一周七自重
 を要す、
 離るる如き、
 外侮を招いて折角の
 数ハ無意義にうん、
 要ハ統率者其人を得る
 たり、
 五月五日記

稀書複製會々報

第三期 大正十三年
 第十七回 三月

第十七回配布本

長崎土産 卷三 十九丁 一冊
 長崎土産 卷四 十二丁 一冊

本書卷二以下の解説は一括して次回に掲載しま
 す。又次回には卷五と追加(卷六)の合本を發行して
 此の稀觀の珍書を完成します。池田氏の藏本が烏有
 に歸して卷二以下の題簽を原本の通りに複製し得ぬ
 のは甚だ遺憾に感じますが、卷一の序文第一行の二
 字が京都大學本に不明であるのを、池田本によつて
 補つておいた事は大慶とする所であります。

第十四回配布本解説

明曆『新板大阪之圖』一枚(原澤綠山氏藏)
 明曆開板の『新添江戸之圖』が古版江戸圖中に第一

位を占むると相並んで、本圖は現存の古版大阪圖中
 の最古のものたり。本圖の版元は未だ明かならず。
 其はしがきに、既刊圖の誤を正し七十餘箇處を追加
 したるよし記しあれども、所謂既刊圖の今日に傳は
 らざるを遺憾とす。往年大阪史編纂係に於て展覽會
 を催せしことありしが、其の際も此明曆圖を以て印
 行繪圖の首位に置けりき。此の圖を明曆の江戸圖と
 對照すれば、當時既に江戸は政治の中心にして、大
 阪は商業の首腦たりしこと、市區街路の配置に依り
 て看取し得べし。蓋し大阪は豊臣氏の衰亡によりて
 其の政治的地位を失びたりしが其の經濟的勢力は寧
 ろ益々伸張したりしなり。
 「水の浪花」といひ、「川の大坂」といふ、その名の
 空しからざることは本圖を一瞥すれば明かなり。見
 よ、大阪城を左盼せる淀川の巨流は、寢屋、鯉江、

猫間の諸川を併呑して、天満、天神の二大橋下を過ぎ、東横堀と堀川を左右に産みわけ中の島に出で、土佐堀川及び堂島を包める川筋と一たび合して、再び木津川と安治川とに分れて海に入る。而して各川の支流が更に縦横に分布せる状態は恰も人體解剖圖の血管脈絡を見るに似たり。此等大小の河川に架したる橋梁の数は、本圖に現はれたるもの百二を算す。そのうち名稱を缺きたるもの十五、交通の要所々々には必ず架設しありて、都市發達の既に著るしかりしを示せり。是より約百年後の延享四年に發行されし『難波丸綱目』には僅に三十橋を増加して百三十二橋を擧げ、二百六十餘年を経たる近年の調査によれば二百四十二橋に及べりと云ふ。

橋の長大を以て聞えしは天満、天神の二橋なれども、大ならずして今も名高きは高麗橋及び心齋橋なり。共に商業最も繁昌の地に在り。心齋橋は本圖には「しゆんさい橋」と記され、むかしは眞齋橋とも書きたしことは貞享三年版の『好色一代女』にも元祿三年版の『本朝櫻陰比事』にも、その奥書に大阪眞齋橋

云々とあるを以て證とすべし。長堀川と西横堀川との十字流に井桁形に架けたる四つ橋も昔より名所の一つに數へられ、元祿の俳人小西來山に「涼しさに四つ橋を四つ渡りけり」の吟あり。

淀屋橋の名に因りて思ひ出づるは淀屋三代の榮華なり。慶長、元和二役の後大阪の疲弊甚しく、諸國より輸送し來る米穀、山と積みて處理の途なしと見たる淀屋の祖三右衛門は、米を一手に引受け、門前に市場を設けて販路擴張の策を立て、大阪復興の端緒を開けり。是れ後世の堂島市場の前驅なり。明暦の頃は即ち淀屋の二代吉安が全盛を極めし時にして其の宅地は今の淀屋橋の南詰より梶木町の一帯に亘れり。梶木町は今の北濱にして、東は心齋橋筋より西は横堀に及ぶ地域をいふ。淀屋は一町人の身を以て豪奢諸侯を凌ぐの概ありしが、吉安歿して家政修まらず、遂に元祿九年三代辰五郎の家財沒收となり、淀屋の名は橋の名によりて永く紀念せらるゝのみ。堂島の對岸曾根崎は、本圖にては空漠たる一部落に過ぎず、曾根崎橋のあたり河幅今よりも遙に廣く描

かれたるが、貞享圖にては沿岸に商家らしきも見え、三座の小劇場も起り、巢林子の世話物にては狹斜の巷として知らるゝに至れり。

更に眼を南方に轉すれば、八尾、平野の邊は人煙尙稀にして、天王寺に至りてや、一廓をなして靈場あるを示し、宗祇法師が「柳蔭ちらと秋立つ清水かな」と咏ぜし彼の逢阪の清水の跡も尋ね得らる。道頓堀附近には四座の劇場を見る。鹽屋九郎右衛門座、伊藤出羽掾座、松本名左衛門座、天満七太夫座、是れなり。當時若衆歌舞妓盛に行はれて弊害起りしより、承應元年六月の禁止命令となり、明暦二年には取締ります。峻嚴を加へ、劇場は容赦なく取崩しを申付けられしが、同年六月再興を許可されたり。されば此等の四座はいづれも新築に係り。禁令以前の劇場とは別なるべし。延寶三年版『葦分船』には一座を減じて三座を載せ、井桁に橋の紋つきたるには「天下一播磨掾藤原安榮」と記し、丸に九枚笹の紋には「天下一出羽掾藤原信勝」と記し、富士山の紋には「松本名左衛門狂言物まね盡」と記せり。又貞享三年圖

にも三座を擧げ、中央を「竹田しばい」とし、左右は只「芝居」とのみにて座名なし。當時の千日前には茶毘の煙絶えざる火屋さへ在りしこと、其の周圍は既に開拓せられて堺海道は商家軒を並べしことなどは貞享圖に徴して知らる。古き遊廓の所在地と傳ふる幸町は本圖には既に其跡を消し、寛永中に開始されし新町遊廓は「よしはら」とあるが其れなるべし。道頓堀と長堀川の間には堀江川未だ現出せず、之に及して當時の奴塚、及び堺道の東に特筆されし梅檀樹は、貞享圖に至りて形を失ひ、渡邊の部落は渡邊村跡と改まり、三十餘年にして郊外地の著しき發展を示し、殊に生玉神社を中心に高津の南北にありし百有餘の寺院の興廢激甚にして兩圖を比較するも殆ど尋究に惑ふの感あり。

原圖に不明の箇所ありしと、校正者が大阪の地理に精通せざるとに因りて、本圖の校合に若干の遺漏ありしを免れず。追つて訂正すべし。

猫間の諸川を併呑して、天満、天神の二大橋下を過ぎ、東横堀と堀川を左右に産みわけ中の島に出で、

云々とあるを以て證とすべし。長堀川と西横堀川との十字流に井桁形に架けたる四つ橋も昔より名所の

會員各位に感謝す

東京及び横濱の會員諸氏のうちで、昨年九月の大
火災に罹られた数が三十八名に上つてゐます。その
内退會者は僅に十五名で、残りの二十三名は災後も
引續いて會員となつてゐられます。直接又は間接の
被害によつて、各自の事業復興に寸暇もない中から、
依然として本會を贊助されます各位の御厚情に對
して爰に深く感謝の意を表します。會員數の補充に
ついては豫ねて苦心してゐますが、今年になつて新
入會者が三名ありました。

第三期既刊書目

- 第一回 風流四方屏風上卷 天和長久四季遊
- 第二回 休息句合 野郎蟲
- 第三回 俳諧童子教上卷 豐世見久佐
- 第四回 風流四方屏風下卷 俳諧童子教下卷
- 第五回 俳諧童子教中卷 獸太平記上卷
- 第六回 獸太平記上卷

- 第七回 明曆版江戸圖 獸太平記下卷
- 第八回 初春のいわび 水の朔日
- 第九回 江戸名所圖會畫稿 客衆肝照子
- 第十回 娼妓畫牒 繪入新狂言
- 第十一回 七十五日
- 第十二回 六方ことば としての花
- 第十三回 長崎土産卷一 長崎土産卷四
- 第十四回 明曆版大阪圖
- 第十五回 江戸二色
- 第十六回 長崎土産卷二
- 第十七回 長崎土産卷三



○大膳家別邸に書簡捨字の席に有御下りし候へ
りて御朱意和紙とお見えす。聖上に和紙の大き
紙大の絹本に染毫のよきも皇位の小き紙に
染毫あり茶色の紙の御年墨鏡なる候を御見え
候へ山紙松方七切り候と受けし和紙の紙
脚の異なりと候生前御覧候ことあり

聖上

御もあはれ

山紙の御覧候ことあり

この御覧候ことあり人を遠しを

皇后

香の御覧候ことあり

まじり候ことあり

まじり候ことあり

たきり候ことあり

この御覧候ことあり

たきり候ことあり

たきり候ことあり

アルハムに取入るべき書簡の内、此の御覧候
三條殿の御覧候ことあり候の御覧候ことあり

えり奉書ニウ折りの御回御書と伊勢守内大
臣聖旨を言ひし候。御書と賜ふ御回御書
とを収あることしし。高は是音家、是音
木戸公執筆の五言一の御極言文ハ半切
ニ認めあると改つる之れを巻頭と収あること
とちり尚ほアハハの冒頭も題字を収
あることしし。御書、御書、御書、御書
と錫山家ニ就て求めその由より二史の表々ハ
四字を取りまんとある。位更をあるこ
と、およびを定め、巻首に北アハハ編

巻の次序并ニ凡例ハ余記述するに
あらず

○昨の文の場々の茶法存席上田中彼等指城士
ハマトン法の沿革につき約二時有り。其法説を
話し候が、知れぬ烟の事あるハ一回御聴し候。其
大略を云へば、最初マトン法を文施し候ハ佛玉
といふ。今七佛田の首都地域内ハ僅くはらうの地味
ニマトン法の中央局あり。此の中央局ハ四角形の
もの。其の建設地ハ中之地帯といふ。御書の傍
全七候し得る所と定め候。佛田の字ハ附く係る

よりともいふは標準尺が金庫に納められておる。此の
中央向を強かるるもの各ありしは學者たるを
の委員中にもあるべき人が金庫の鍵を強うするこ
とより、輪次各回が委員長とする言ふ、世界
の大戦の時、鍵は獨逸の手にあるの事知らしめ
といふ、何分爆彈巴里の全市に落下し、高塔の塔下
たるは、中主地帯も危うしと、他に金庫
を物さとの強さありしが、是も及ぶまいと、林
木を以て築き中も保衛し、安全なるを得たり
と云ふ、此の金庫中にある尺は最初佛玉を以てし

この尺は、後に定められたと評議の次第の場合比較
の用を以て保存しある言ふ、佛回が最初メートル
法を強うし提議して其の可決を得、その基礎尺の
研究にありし言ふ、佛回革命の前も、革
命中七尺の研究をつけてありといふ、何んとも云ふ
七地球の緯度から割出し基礎を以てんとし、
海にありし言ふ、容れる葉の言ふ、其の緯度の或
地域、属する言ふ、不変性の尺、度をもつて丁
算は測量に用ひし言ふ、六七年の革命
と此の測量に要し、その間革命が起るに

を行ひ世界ニ普及を圖ふに佛國が素志を貫ぬ
く道にありましかと説いの佛力漸く納得しと或
點ニ再調査を行ひ標準器七作り直し以佛國の最
初に此の標準器を以り此時よりづう千子を以り
不變のものとし此の後にある金屬を保すん心蓋々
不變のありしが覺ゆせん此の依つて此のこ
とよりして三十心のことなるも、其の代に此を以
よの心を信んぢるに合格とせん、更なる心り直し
此の採用せんと、蘭州の各處に令つことなるも
日本も此の際、蘭州の各處に令つことなるも、
保すん心

れを以て此のメートル、此の代に此を以
此は歴びあるもの際、佛國が初なる、定め此
を以て保すん心の論の委實なるもの論に起つたが
えの保存と愛で列との論もあつた、亦第一全部の
標器が毎くさう此時の用に、新定のものとし、永
久に保存すべしとの論もあつた、而して此の
に、此の外交官の措置に任じらる
ことなるも、中央局を中立地帯とすることと此
此時に決したるものも、田中総領事の談ふ近年此の
同盟と世界戦後に出るに國際連盟に移すか

よからうと系謝であつた、是ハ国際連盟の金分
多くあるから便利であるといふ主脚して昨日提議
であるが、其高連ハ後り之を可とすといふと系謝
ハ今次の国際連盟の前途といふ事も其と不安
の事もある、まゝに後り之を危ういといふ事も在つ
て、田中殿ハ、ノートルダム連盟の政治家の心
つれ、此の扱ふあつたといふ事も其のと系謝つて
の比、

五月十九日録

○北印森森弘庵田中殿を往に探し其墨蹟有り
惟新志士遺墨也、ねめあるもの如き廿一也、
+

文云

流渠修作



弘庵殿後、孰も津波市の午に後り今余の筆中
のものも、刻あるもの或ハ法人の、荒し日本人と
まゝハ主原本所か、尚ほ攻めべし、五月十九日記
○久原鑛業会社の油査部、左聯の利木本祐臣と系
四十と、まゝに満以、其の荒い人が、或ハ其の精進
してゐる所か、これ迄も、其の荒い人が、或ハ其の精進
露園の事、情を知つて居る、其の事もスエーデン

物に比すればを核とし又の物人を招き其談を聴
へ此其話中よハ左のこときことかある。

- 一モスコーの停車場に着し此のを朝の四時頃
に曉きキエステーションに在ることを由義を
くゞえ此停車場が目的は此ことハ汽車賃
の心得書の内は以上の順序に便宜の軟かい順序
或許とあるも等級を撤してあることハ、三度底に
レニンの傳や共産主義論と云ふ取らる者物を著
つておれこととある。

一 度かゆけし旅段に着し此其旅段ハ政府の種

等と係るものハ外國人のある宿泊を許せしめ
こととするものあり、此段ハボーイが五十人あり、皆
ハ壮丁ハ少年少女ハ七八を以て、此等の多くハ
皆探偵のあり、彼の中より探偵用の秘を各
もあること、その言の強さを擴大する技術のあり
てその後ハ各處に高しとあるハ、低級なるも
少きあること、此の出来の抑入るものあり、また
ハ昔の宿の旅店に宿して誤解を受けしよりハ、
此こと、を旅段に送人にとりおれ、
一モスコーの住民ハ皆其服を纏ふものあり、

元貧民の層は高底も其處の物産を産つ
てゐる、勢がゆるむを産る家も亦、少くは、勤
作を以て使用するといふことの迫害かつき纏ひの
一向の差のぬといふことである、昔のハートン
グラード、今はレニングラードの首都と此の
所を較べると流石にレニングラードの方こそ
又やむを得ず、其の存する出席を
そのお南に股装をする位なことに今も
尚ほ田の如くである

一 昔農主義の三四ハ一戸何人も労働することを

+

得ることである、働かぬといふは、税を徴せら
るゝ一家の家長や家婦を以て課税を受けてお
くものがあつて、税と主義と縁のむ多くの使
錢の所得のあること、自然感強の極む所の家
庭、温味は無い、日本の家族主義ハ之れを較
べると、更なる極む有かれ味が感せらるゝ、日本
の物産と飽む、尊重維持を要する

一 昔農主義四七経路上ハ大失敗である、且取初農
民に對し、其の生産品の生産に對する、その以
外ハ田家と捧げること、其、其揚句誰ん

自分の見解以外の生産に従うことへの無きもの
この政府は財政困難に陥りその改めを課税
をすることよきとしかあかし外資と農産物の買
手がうまく行かうまい、是れが為政家の能力が欠
けしめるため、鐵鐵僅を醸すことよきと
一 露國の財政は現在ひどい状態に、其の爲に
行紙幣は硬貨準備を以て是を行してあるの
と不換紙幣との二種あるが、此の不換紙幣
と他の紙幣とのヒラキが實に大きく云ハ
、硬貨準備のある紙幣十圓が不換紙幣

幾つ用もあるが、日マ下流とヒラキ
がますますエラクする傾向がある、此點は獨
のマルリと同様である、貸銀の仕拂へすして
不換紙幣であるから、實にミジメあること
である

一 露國の主義はこれを平等であるが、事
少數の支配は、採炭の権限を以て、或る少
数者が此の主義を強行してある、主権幹部
を以て同主義者を以て出するのび、自由を

選承か出来る海にちるの、今ハ色この多所ハ
 農政府ハまじい勢ハ七しまハが、炭々アヤリ
 危うい形勢ハあると云ハレ

○三四村ハ鳥魚ハ此頃壬生寺の海面粉紙見物
 出ルハ此頃の比ハ多ク記事ハ台記(幸々)ハ此頃
 人ハ出ルハ一向興味の無いものハ此頃ハ古代別
 の研究ハ此物ハ關ハ此頃ハ此頃ハ此頃ハ此頃ハ
 コシナハ此頃ハ此頃ハ此頃ハ此頃ハ此頃ハ此頃ハ
 感ハ此頃ハ此頃ハ此頃ハ此頃ハ此頃ハ此頃ハ

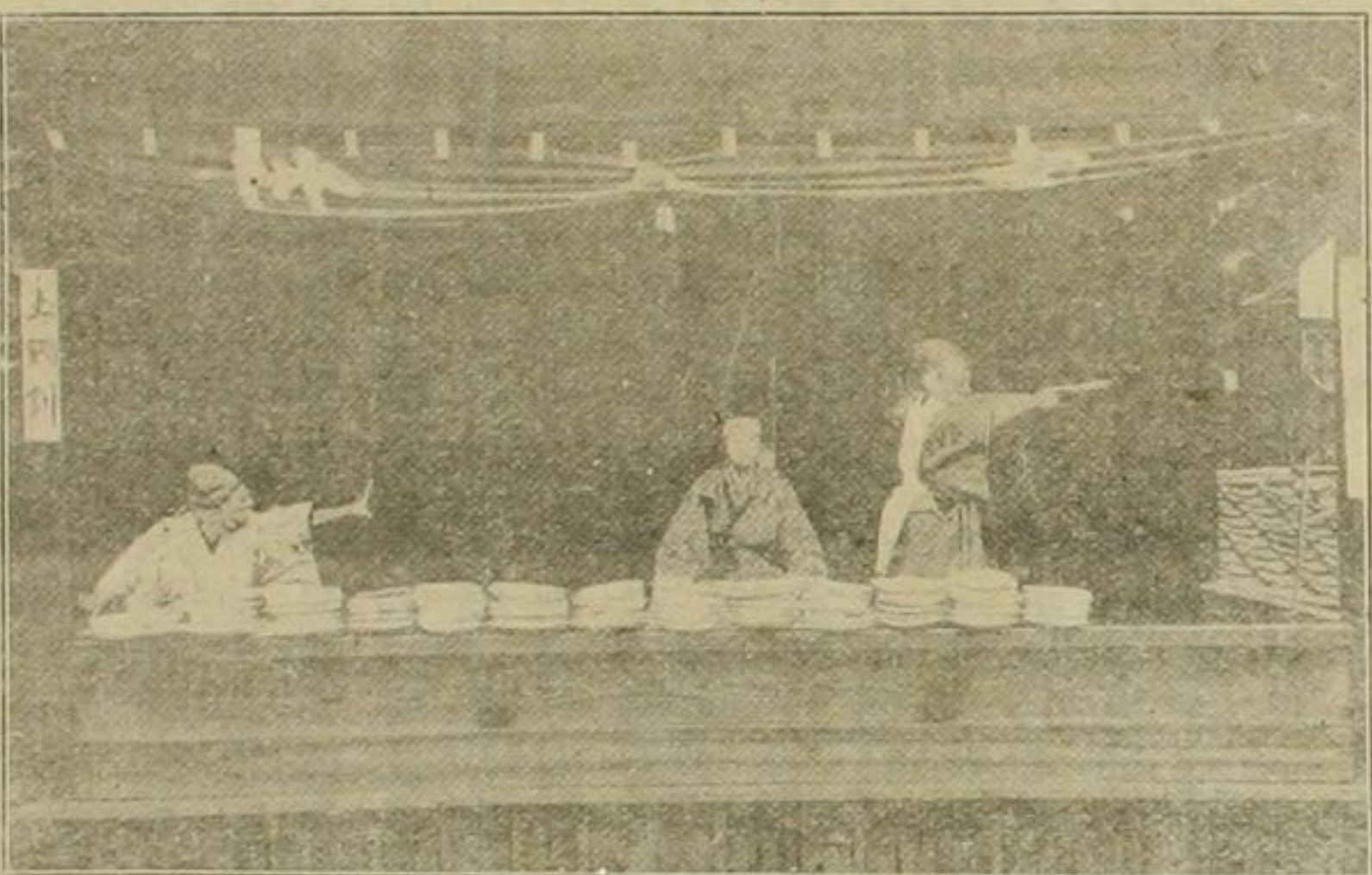
上月十九日記

壬生寺の假面扮戲

鳶 魚

花時の京の雨、心配になるのは嵐山のみではない、強くも降らないから傘持つ手も軽く、兎に角寶幢寺へと急ぐ、爰の年中行事の一つである壬生狂言の第一を見物しようとする、今日から廿日間演演されるので見れば、郷土の人の足も忙しくなる筈もない、只だ旅中の我等は雨を厭つても居られぬ、それに寶幢寺の扮戲者と分裂した一派が明日から神泉苑で開場するといふのを聞いて、對抗する二班の扮戲者が何だか競争状態にあるらしく思はれたから、我等の興味は大に誘發される。

舞臺は二階建に構造され、橋掛りに續けて鍵の手になつて居る、正面は破風造りて楣間に紫の幕を張り、兩楹の間は勾欄でなく、板張りになつて居る、清水の舞臺と見せないやうにしてある、清水の舞臺と同型なのだ、何だか人形芝居の舞臺面が想ひ出される、見所の棧敷は舞臺との間に若干の距離を置いて、丸太と藁藁と拵へ、屋根には



からは元祿の臭ひが嗅げない、我等の鼻では寛政度の臭ひが

怪しい古い鐵片を張つた、本尊が地藏様のせいが見所には兒童ばかり集つて居る。
 扮戲は全體で三十餘番あるから、二十日間の續演に取替へ引替へ變つたものを見せて往くが、炮烙割だけは毎日必ず演じるのだといふ、しかし其の理由は聞かなかつた。

壬生狂言は身振りばかりで科白も歌詞もないものだから、臺本も筋書もないのだ、實際に見物する外は、繪本扮戲盡其の他の圖畫したものに依つて想像するより仕方はないのである、壬生狂言の中で獨特だとされて居るのは、猿、桶取、花盗人の三つだけれども、花盗人は能の狂言を奪つたものなのだ、繪本扮戲盡を一見しただけで、直ぐに能や狂言が持ち越したのが甚だ多いことが知れよう、壬生狂言の開始は文永十年だと聞いたが、今の扮戲は慶長年中に始まつたのが多いと云はれ、元祿十五年に趨向を一變し、新扮戲が増加されたと傳へられて居る、けれども眼前の扮戲

する。

壬生狂言と脇狂言

此の炮烙割は中座で近松記念興行の際にも演じたものだ、勿論それは假面なしで科白もある、關西の劇場では三番叟の代りに此の炮烙割を遣ふことは珍しくない、其の時に聞かされた、劇場一覽(寛政七年刊)に『寛永明暦の頃は前に踊を付、本狂言といふは今の脇狂言也、小詰役者是を相勤む、壬生狂言の如く囃子の拍子に合せ、物を云はず、花盗人の狂言などをなす也』といひ、古樂隨筆に擧げた浪花戯場の脇狂言は、花盗人、かつこ、ほうろくわり、座頭川渡り、かごぬけ、寺子屋寺入師匠釣、鞆入板垣、念西坊、井戸がへ、地藏祭、萩大名、茶つば、旅人をこまめ、野てつぼう、辻談義、米俵盗人の十六で、其の中の六つは、繪本扮戲盡に載せてある、さうして現在大阪の劇場に炮烙割のやうに、其幾つが残つて居るだらうか、だが同じ炮烙割でも劇場一覽には壬生狂言の如く無言で演じたとある、さうなら只だ假面を使用しないだけの差だが、現在では無言でない、寛政度と今日とは同一な脇狂言であつても有言と無言の相違がある、寛政度の脇狂言は壬生狂言と同じでないものも、壬生狂言式に無言で行はれて居たのである、しかし壬生狂言は鉦と太鼓と笛だけの囃子である、が中座で見た炮烙割も囃子は壬生式であつた、斯うして見れば上方演劇は何時から壬生式の脇狂言を用ひてゐたか知れないけれども、壬生狂言の版圖は決して寶幢寺の舞臺だけではなかつた。

の舞臺で綱渡りや輕業をしたのも壬生狂言の影響であつた。父の思が竹田源助について『輕業に品々あり、猿かへりといふ事、源助ひとりなるべし』といつたのを思へば、蜘蛛連飛などといふことも恐らくは壬生狂言と關係があつたらう、人倫重寶記(元祿九年刊)にも『面をかぶり鬼のまねする壬生千本(念佛躍は此の兩所にあつたのが、千本の方は早くなくなつて、壬生だけが残つたので、壬生狂言と云ふやうになつたのである)の狂言をもろこしにては嗔拳といふ、日本にては又手々といふ、又竹竿のうへへのぼりて戲をなすを、もろこしにては都廬といふ、日本にては竹の鹿といふ』とある、此の頃では其の淵源を問はず、壬生千本の演技が著明であるために、此處から發生したやうに眺めたらしい、兎に角當時にあつては此處からの影響として考へて宜からう、念の爲めに繪本狂戲盡で壬生狂言の中に綱渡りのあるものを算へて見ると、猿、鶴、羅生門等がある。

羯鼓炮烙炮烙割

羯鼓炮烙といふ狂言は新市が開かれる、其の新市へ店を出す場所を争ふ、羯鼓張りが夜の明けぬ間に來て第一の場所へ店を出し、未だ曉までは間もあるといつて暫く眠る、其處へ炮烙賣が來て、羯鼓張りの店の先さへ店を出した、一體場所は早く來た者が取り勝ちにするのであつた、やがて羯鼓張りが目を覺して、後から來て先へ店を出すとは怪しからぬと喧嘩が始まる、それを代官が捌かうとしても、直に兩人の先後が知れないので、賣品の由緒に依つて出店の前後を極めよう

ガンデンの影響

今日も壬生狂言のことをガンデンといふ、それは鉦と太鼓の音からとつた稱呼である、それも昔はジャデンといつた、天保十一年五月芝神明の社地で、天満宮の開帳のあつた際に江戸へ持つて來た壬生狂言の見世物が出した、其の鳴物に半鐘を入れたので、火事と間違へて消防夫が出て來て大騒ぎをした、此の間違から半鐘を銅鑼に代へて、太鼓笛鑼口銅鑼で興行したといふ、現在の壬生狂言にも半鐘はないが昔は半鐘もあつたのだらう、狂言の對馬祭に『まづ山を作り、船に載せ、片端しから押し引く、囃子物は鼓太鼓鐘で囃し立てる』といふのを參考したい、半鐘と太鼓だからジャデンジャデンだ、鉦と太鼓ではガンデンになる筈だ、天明二年の臺本大願成就天下茶屋聚の科白に『あのジャデンをめぐりやすにして』といふのがある、メリヤスの刊本は寶曆七年のがある、と聞いて居るが、芝居でメリヤスを遣ふのは餘程遅れて居るだらう、メリヤスの前に和歌山節が使用されて居るが、ジャデンも使用されて居たらしい、果してさうならば是も壬生狂言と歌舞伎狂言との關係を認めさせるものである。

芝居百人一首(元祿六年刊)は、坂東又太郎について、『此人しゆらごと輕わざごとをしこなし』といつた、同時の伊藤小太夫も一本綱を渡るのが上手だと評判されたといふ、是は壬生念佛躍餘考に『元祿の比劇場にて輕業といふ事せしは、狂言よりうつしたる藝なり』といふのを證明するもので、歌舞伎といふ、双方口々に云ひ募つて埒があかぬ、それでは就技にしようといつて、羯鼓張りは棒を振る、炮烙賣りは棒を持たない、借して呉れといふが借さぬ、仕方なしに土鍋を振る、羯鼓張りは羯鼓を打つといふ、炮烙賣も桴だけ借りて土鍋を打つ、代官が急いで相打にせよと云ひ附けたので、遂に炮烙賣が土鍋を打割つて負けになるのだ、是を歌舞伎では土鍋を割つた處で、數が殖えたと祝ふやうにしてあり、壬生狂言では首から掛けてゐた土鍋を割ると同時に、店に出してある多數の土鍋を羯鼓張りが悉く投げ出すことになつて居る。此の趣向は狂言のが古いらしい、しかし歌舞伎のよりも狂言のよりも、壬生のが面白いと思ふ、壬生狂言には能の狂言から取つたものが多分あるやうだが、興味は却つて原物よりも勝れて居る。

南都傳來の假面扮戲

此の北川管長から南都七大寺に傳はつた咒師の法に依つて假面扮裝が起つたと聞いて、今更らのやうに奈良の年中行事の諸寺の練供養を思ひ出した、如何にも假面扮戲は此處から系統を引いたものであらう、元來假面扮戲は佛教藝術なので見れば寺院から離れず、此の壬生狂言が存續して居るのを満足する、さうして壬生狂言は如輪上人に依つて正嘉元年に再興されたといふ、此の再興から今日までは既に六百七十八年になる、猿樂の能も假面扮戲なのであつて、壬生との關係はなくても慥に同一系統のものであるが、其の狂言は假面を使用しないやうになつた、それが壬生狂言に轉入して

は假面扮戯に還元する、凡俗が佛菩薩になる、其の殊勝な相好を現す處に假面扮装の効力が顯著であり、必要であるのだ従つて假面の大切な意義があり、假面から離れない理由もある、猿樂の能の如きも假面を貴重して居るが、只だ傳來に依つて貴重するらしく見える、歌舞伎役者のやうに上手に顔を拵へるならば、必ずしも假面の必要はないだらう、猿樂は謠はなければならぬ、謠ふには面を掛けない方が、便利である、故に顔を拵へることがない時代に假面を使用した、今日も能役者が顔を拵へられないから假面を襲用して居るとしか思はれぬ、然るに壬生のは能役者とか歌舞伎役者とかいふ特殊な人が演ずるのはなく、村人が上場するのである、勿論相應な練習はするのだが、兎に角一般人が勤めるのだ、役者といふ特殊な人ならば顔を拵へることに勤められぬ筈はない、一般人ならば其處まで手が届かなくもあらう、壬生狂言は佛敎藝術の假面狂戯の意味の外に、喫緊な假面尊重の理由を持つ、爰で逍遙博士が兒童劇に假面を使用したのに想到せざるを得ない、若し兒童の顔を誰かが拵へて遣るとすればそれは却つて稚氣を損じて了ふ、此の味が壬生狂言にもある、彼が稚氣を持つて居るのは鳴り物にもあらうが、主として假面使用に由來するやうに感じた、又た假面から離れられない、否離せないことは猿樂の能の比でない。

今日は壬生狂言といふが、本來念佛躍といふのが原名なのだ、千本と壬生の兩所て興行されたのが、一方は絶えて壬生だけに残つたから、今日の稱呼になつたのである、しかし我等は念佛といふ名にも満足はせぬ、躍や鳴り物を生命と

するものでない以上、飽く迄も假面扮戯を云ひ現はすべき名稱でなければならぬ、寛政元年版の繪本扮戯盡が壬生狂言盡といはないで扮戯盡としたのを嬉しく思ふ。
此の日我等を壬生寺へ導いて呉れた田中縁紅氏は、忠實な壬生狂言の研究者で、資料蒐集に先きだつて先づ三十餘番の演技を逐一に見物して、明細に其の模様を記述して居る、臺本も筋書もないものだけに、縁紅氏の記述は此の研究に無二の依據となるであらう、其の一日も早く脱稿することを望んで已まない。
此の見物は四月二十一日で、別に考察することもなく、思ひ出るままに書き附けた旅日記を、二十八日に抄出して見たのである、纏らないものなのは自分でも承知して居るが、但だ未だ見物しない方々の考慮を促すことを急ぎたかつたからである。

徳川義侯の態度 (北海道に於ける) 下村關路

位山高きあれども正しくも麓の道にまとはざりけり
政事民にありとふ時を知り世を知る人といふべかりけり

戀病大臣病はことほりの外なる者と世にも云ふなり
大臣とふ病を思へば物知りになるや宜しきならざるやよき
藥にて效驗なしとふ病なる大臣病に何を用ゐん

軍人團の安動(函館に於ける)

いくさ人軍人ども魂をねり合ふのみと唯に思へり
大君の勳旨をむきて軍人あらねば擧げに身をやつらん

○花洛名所圖今て東山と鴨河の圖を載せそんこ山

陽の記文かきよし芝き人をも寄りあふり人の足
に鴨河の圖巻に載りし文も、山陽の集りに遣し
る文也、何人も名所圖今、此文ぬめあつと氣か附
あらず山陽研究家の目を連ねて、種々のなるを以
て取つて山陽の図を載せしむ、
鴨河の風景を語らしむるの料と充んとす、
但し原文行むと云きあつた為め寄し元りの論文を不
明に脱ししものあり、一應照合を要すとす
五月二十日録

○大坂の書解だんまやの公に古版地誌複巻あり
運命抄を、華分船六冊と浪舟鑑六冊を出し、
是を名残りに、寂斎を告げ、内室百名計りの今

比較して又と一番に近ういふもの爪哇の面は、
と思ふに同時代の物に比し、その面を比較して
くハ一層近似の點が看取せらるゝが、一
千年以前の法隆寺のものも、美をたうからせる
爪哇の面を比較するの必要ある、充分の観察も出
来るべし、
ハ何と云ふ同系統であるかの點が、勿論これハ
能の面と比較して、ハさう仮樂の面とを比較して、
る、日本の能の面ハ一躍大變化を著し、比より甚しく
奇麗とすつた、古代の面と比較すると、甚しい差

があること、ハさういふ、大体どこの面も妖怪を形
象に比し、その面を、爪哇のハ餘程
妖怪味を脱して、人の面に入り、ハ、日本の
能面は、比し、ハ、西洋のマスクの研
究家のハ世界中の面を、挙げて、尤も優秀のものも
日本の能の面として、ハ、評すは、
是に、ハ、併し、面と、ハ、
と言ふ、ハ、何れか、
し、ハ、
を、ハ、

用かきといふ面用の一つとあるが、えんを本義と
すんば能の面より七角或は六角をさうとせしむるを得る
ことなるが、**面本**義は徳島減じし仁義の扱ひ思
ハル、日本の古代の面の傳統ハ爪哇から来たかどうか
輕忽に断し置けるが、中より、**踏**の踏似のよみか、**法**
隆寺の卷面の内より、**踏**とよみかある、爪哇の古
面譜の内より、同式のものが見へる、亦人間や妖怪の面貌
もの何んひもさう、記述のことき、**切**解る摸倣も
描い比よみか、**法隆寺**の卷面より七角あるが、世界の
何んいん(四角いん比か)と張る北式の七角ある、一と見ると

諸國のマスラの型も或は古の時代より移り来つ
て、**えん**と倣つ比形蹟がある扱ひ思ひ、**因**とよみか爪
哇の傑つり人形を造る日本にボウく来たり、**えん**
ハ皆平板な底いよみかあるが、**造**造ハリ、**えん**は
入ん比と示すん比のよみか、**えん**ハ主体のよみかある

九月廿一日録

造造の書寫は銅に心えん比自像が重なりてあり、
高さ一尺送らすの坐像で、例の造造の扱ひ憑り
とある造造の平生を刻し、**えん**のよみかあるが、**面**貌が
えんのよみか似てある、**北**面**えん**のよみか似てあり

銅心と云ふは、柔か味があつて大成切の心と
あるの感服した心ある長谷の夾心と云ふまゝの
年若い人だと云ふが、助木大悟の徑にあるよ
人格のよい人だと直達は稀賢してゐた。最初
銅像が柔か味が出すのと、直達は熱者とい
と云ふが、いふやうな出来れば木彫以上のあつた
の使い方が草書と云ふことと、西條が如何なる
趣味がある、自分はいふやうの心と云ふの日本
見はことなし。

○山田清心の経書と傳る稀に複製を来たす十月より一期

と劃するつと、其他念のほろ一書を刊行し複製の
宣傳を為すべしと余案を出して、同人十人並くの整
目と摺印を一氣に行をきてとを編纂家と一部
の書を出すに付て、何れも遠くも春湯をこ初め
山田と合版して出さし、と案し、余は主案
し、内容の次中丸を左の如し

内田 一 稀翫圖書と其の複製、特に工口に就て
一 稀翫圖書の趣味と其の趣味の普及と
欲する所以

三田村 一 既往に尊重せんとすべし圖書に就て(狭斜)

文學小説を云ふ

林一 浮世傳と社会教育

和田一 徳川期の小説略沿革

坪内一 演劇と浮世傳

果木一 古洋稿と浮世傳

沢谷一 小説の挿傳と其心家

山田一 立むかへ木離と摺

市橋一 國書館の刊行に入らざる國書に就て

附録：小説目録兼：非愛品圖書目録
を収むるもの

右擔任の同人と既述を多く併せて一冊の行をなすこと
は、まことに取捨を要し、そのことについては、
纏まるべく、約一巻に二十頁とすべし。本文二頁、
目録五頁、以上五枚位を以て、
事、以上の改訂も、
十月迄に出来を切す

五月廿一日記

○此頃併後枕頭の小説を讀み、
兎も後古く、の母よを讀み、
半七捕物帖といふを讀み、
末節の因引をつとむるもの、
夫後の追懐情を記し、

○寒菊

朱書
自元冷齋也真覺清容
四香心共梅
早梅瓶下也橫斜影底
處看西日堪心新

淡碧花開三四莖
四香心共梅
早梅瓶下移盆
自元冷齋難中
意推為折第幾傷
冷艷偷抽楚曉香
一種芳心動在
低頭那肯知仙玉

殘傷也花荒

才三句也一樣清姿

次貝爰

加秀韻

即那但肯
事地句

言身如仙一樣也如仙字後句點出
不妨此法古人絕句有之

朱書

律詩防於唐而唐之樂府止取絕句蓋拘於對仗

而操平仄類其音節亦欠清脆故不如二十八字
之便然竹為亦後世雜瘻唱歌而後有此意
古人名篇多在絕句不在律詩況後人乎獨
陸放翁縱橫自如律當如此也耳

不生每得詩為唐人地有字托際不祿拍謝
醒絕技教篇以性怪不免補漢至後人字之
成猜謎耳夫老翁為啼茶熟香清眼前無
教題目不可勝賦何苦必去懈題拈新也
為也

春架海屋其佳七共かり席上出字題を以て録し思ひ

檀紙



春日同賦新鶯玉谷

詩一首

藤原芭

未施暈萬綠迎氣谷鶯

新熠熠翻文翰嬌羞試嫩唇

忽驚山客睡未報却芳晨

入竹看雞羽逢梅聽可親誰

花開錦繡波鳥豈精神誰去

十

行做莫或成千里春

くも歸しや其一毛、日唯寂に傳りたり及故を用
人の果沈回、刺意、さうと、浅田の山、さうと山
陽の扇面を歎、しと揚けさう、え、え、え、利休を
詠、しと七絶を揚、り、又、時、座の、思、是、水、の、旋、縁
七絶を揚、し、や、物、を、揚、け、お、き、さ、う、北、山、陽、の
意、上、座、あり、と、え、く、さ、う

五月廿三日記

○五月廿三日 帝大構内史料編纂部の催に係り才十二面史料展覧会の列品を見ふ、其大要を録す。

才一室より、此年の震火に罹り原本の焼失に係りたるもの、複製本類陈列しあり、惜しく感ずるもの數點あり、今、唯此等の書三冊、影方を存すのみ、此部類の永久に存せしむべきか、おぼしむるに、全部の目録を、おぼしむるに、印の特に、惋惜に値するもの也。

第十二回史料展覧會列品目録

第一室

複製本類 昨年の震火災により原本焼失にかゝるもの、二三
並當掛既刊圖書類

一 複製本類

- 一 谷森文書 (影寫) 原本東京谷森眞男氏舊藏
- 二 左經記古寫本 (寫眞) 同
- 三 尊圓親王後伏見院御贈答消息 (寫眞) 同
- 四 刻法華義疏卷一、卷二跋 永仁癸巳素慶 (寫眞) 同
- 五 聖護院道興筆古今集跋 文明三年 同
- 六 福島正則畫像 贊雄嚴叟 (模寫) 同

第一室

河の七粗石より印譜の所抄し

○五月廿三日 帝大攝内史料編纂部の催に係りて十二面史

第一室

- 七 大洲加藤文書 (影寫) 原本子爵加藤泰秋氏舊藏
- 八 足利義尚筆和歌短冊 (寫真) 同
- 九 足利義晴筆和歌短冊 (寫真) 同
- 一〇 横川景三筆七絶 (寫真) 同
- 一一 加藤光泰畫像 贊 文祿乙未南化玄興 (摸寫) 同
- 一二 文之玄昌筆蹟 (寫真) 同
- 一三 松永貞徳筆詠草 (寫真) 同
- 一四 中江藤樹筆蹟 (寫真) 同
- 一五 中江藤樹書狀 (寫真) 同
- 一六 室鳩巢書狀 正月廿六日 集堂小平太宛 (寫真) 同
- 一七 貝原益軒書狀 八月十二日 吉野屋權兵衛宛 (寫真) 同
- 一八 太宰春臺書狀 十二月廿九日 外山元庵宛 (寫真) 同

二

- 一九 海山元珠筆蹟 (寫真) 同
- 二〇 藤堂文書 (影寫) 原本伯爵藤堂高紹氏舊藏
- 二一 豐臣秀次書狀 陽七日 藤與右衛門尉宛 (寫真) 同
- 二二 徳川家康書狀 三七 藤佐宛 (寫真) 同
- 二三 本多正純書狀 十月二日 藤いつみ宛 (寫真) 同
- 二四 本多正純書狀 十月二日 藤いつみ宛 (寫真) 同
- 二五 圓照寺文智女王御消息 八月廿八日 藤堂和泉宛 (寫真) 同
- 二六 秋元文書 (影寫) 原本子爵秋元春朝氏舊藏
- 二七 日光山東照宮造營帳 寛永十九年 (影寫) 同
- 二八 東海道繪卷 (摸寫) 同
- 二九 同 (寫真) 同
- 三〇 同 (當掛編註史林聚芳) 同

第一室

三

河の石粗石より印譜の所抄し

○五月廿三日 帝大構内史料編纂物の作に係る方十二面史

第一室

- 三一 朝鮮人來聘行列之圖 (摸寫) 原本子爵秋元春朝氏舊藏
- 三二 同 (寫真) 同
- 三三 同 (當掛發行教授用掛圖) 同
- 三四 傳徳川家光枕屏風世界圖 (摸寫) 原本東京北村泰一氏舊藏
- 三五 風俗繪屏風 (寫真) 原本伯爵井伊直忠氏舊藏
- 三六 傳藤原惺窩筆莊子郭象註 (寫真) 原本東京本所安田善之助氏舊藏
- 三七 伊勢物語慶長十三年刊 (寫真) 同
- 三八 瀧澤馬琴筆八大傳草稿 (寫真) 同
- 三九 同 (當掛編輯史林聚芳) 同
- 四〇 足利尊氏筆法華經 (寫真) 原本鎌倉圓覺寺續燈庵舊藏

一 既刊圖書類

一大日本史料

今回の陳列の重なるもの

新井白石の関スルモノ

菅原道真の関スルモノ

風俗の関スルモノ

在三種の外に、最近の採訪に係る雜種を陳列あり

新井白石の文書ハ二室を占ちる程の多あり其物に注目を惹ききつたの如し

白石の私印 五顆十二面

何れも粗石より印譜に所在し

居るに名実歎を云ふに初め也

望上野中は房長

白石者簡を

珍しく感し字に近衛基巡公に宛

て字長簡三巻と云ふ中に朝鮮聘使

の儀例に關し自説の行見等を載す

この書面也

近衛公花

白石者本つと云ふ岩崎家と云ふ七八點出と云

やの本朝甲斐者福を云へ未歎云大の

朝鮮與日本和平の條目朝鮮物語(三冊)

白石者本つと云ふ

白石の逸齋新井太吉大老の親族清水八

郎所著のもの七枚並又書けり、美の、流

者并に岩崎家其他に散在するもの、皆

大老の年譜に記し出さる也清水の所著と云

ふもの七亦大老より傳つたものと云

ふ、

清水の所著のものに左の數點大老の筆を以

てり

秋原重秀深劾考(壬辰(正徳二)九月十日)

えははゆに細末もて視の字宛をとくえ
しきこのまじし物定む行重秀を縁助
しけること折なき味の記も七載せあ
り改貨儀の行のれも七主とて此人
の抑制に信ふことを福くするもの此
を行遂に四能免するものなり

朝鮮聘使待廻中(一) 一冊

公進録
五蛇日曆
とある
なり

白石日記 元禄六年一正徳 十六冊

皆白石の文書なりと大切なるもの

新井太吉不花の

白石自身折々雑記三冊

七出海せんありとありこ九の書つとあり者
に賞上る後とてと九の字あり今も人の
手よりあり、清視するも、白石に似似
するもの物ありしき節あり、或は此故を
以つて官内者に納まるるなりしものありと
ふ。

新井白石編待廻(五) 五帖 外日録一

これハ書内者同出寮花をて同ハ書

子物細く述べてあるもの久しく読みお
こしあるもの今次初め七回読もう

菅原道真の関する史料七二巻を占め
た七面あり感くさし入り有名なる縁記傳
小巻也

一北野天神根本縁起 九巻之内

國寶 書傳 卷三 中五 神皇正統記

一北野天神縁起 二巻

回寶 書傳 卷三 中五 神皇正統記

右ハ北野神社所蔵之縁記後者を寧
ろ目而七く之元元初出の如く前者と
自と感く

一此外ハ北野天神縁起母卷^三内列せし
ありき、之ハ本^四外題後柏原

天皇宸中、書北條之元初三條西宮降
とあり

一鎌倉花柳天神縁記 ハ今ハ前田侯家の

花とありあり、上中下三冊にて藤原行光
行能の初書、奥出、元應暦(元)三月玄律大呂

(十二) 告朔行長とあり

一 画像七さきしし出陣せんちうとあり、若公の画像
い何所ら凡顔一とあり、淡磨の天神の画像
画と又のふきよのるんか皆相顔有雅るんも
多くの古畫のお顔い品位るく皆キの少且
つにチリレる所あり、前田房と記する

胞輪天神画像

の如きい顔日瘴怪のお顔るく此画像の傳来
い七と南紀滿の弓の師吉田忠兵衛重氏
の所蔵るくしよの一旦深川の傳言永代寺

の有り帰し慶安の次三河鳳来寺に移り同
寺の子坊實良院に在りし所、文化四年實
良院焼亡しんも幸に此画像災厄も
免かん日後院主の頼山陽と號し七画像
の由来と靈異を記すしあり
山陽公全集紙にいと一編本に記を書し
る一幅亦坊に掲げありた題あり

天保二年甲申在辛卯秋九月七の山陽

外史頼襄撰并出

とあり此文悲々山陽の集るるぬめありたる

へし書を致すを余ふ山陽録にぬちること
克歎

爪似に蘭するもの内 此の四條河原に在るもの同く是れ以前

村井を兵衛所為の屏風六曲半雙二種外

三曲半隻等徳川初納のものをも品せしむ

くさくさ外に前田考家の

祭礼傳子 傳土佐重吉

柿本あまのり所為の

霞殿物語 上中下三巻

七おもしろく思はん

最上の標記にかゝるものいたのめし

一 弘仁格抄 上下 奥書 曆應二年二月十九日抄云々
紙背 具注 曆 二卷 公爵 九條道實氏所藏

二 越中國官舎納穀交替記斷簡 延喜十年(國寶)
紙背 傳三昧耶戒私記 一卷 近江石山寺所藏

三 足利尊氏春日社奉納和歌 曆應二年十二月 一卷 東京 保阪潤治氏所藏

四 子純得么贊富士山圖 延徳庚戌 一幅 東京 岡崎正也氏所藏

五 豊臣秀次書狀 駒井宛 一通 東京 保阪潤治氏所藏

六 天海僧正筆和歌並東源和韻 一幅 同

○もろ大隈別邸にありアルハハに収らるるに二箇
油心をとり二十枚を抽出す、其内に鬼燈燵湯
赤山鹿角、春木義彰、金玉均、津田仙、田中芳男
二條基弘、宗伯、森有禮、熾仁親王、大久保利通
奈良原堅、野村胡堂、清造千秋等あり、加點の
数氏中二海に属する者老候との関係上洩らさ
可らず、是れに披考ありて得る能はるるしが、此後
十四年後未だ此記の方向を披考ありて僅ら得
たり、森有禮、熾仁親王、大久保利通等も、此記に
前日抽出しるものありて不足の感あるを以て

ら二海にあり、而して今之辭令書を抄點し、其
の本條に巻紙として挿入を要するもの七八枚を採
り撮影せしめたり、今之を大隈全部の撮影
をりし。

五月廿四日記

今之抽出するもの由に、此の様な出状の書
あり二箇に、るに十月借用書を日同書
しるものあり、やゆの窮迫時代は此の如
りしと見ゆ。

○谷昌平、三山と稱し大和の住居者を以て、聲が
かある、此人森田節齋と親善あり、此の如し、身

出版之元以遠行之日華語加好種物めある。三
山陽年々之就耳か晩年亦少少の以華語のあ
る所以ある華語中事の山陽に聞するよふある
故を以此に取魏侯し、今朝抄録し山陽録とぬの
日こころに、今茲より山陽に聞するよふ略し、あ
他を抄録する。

貴静候華語中云々

日 僕有耳故聽此候より、美君三無耳焉而

日 僕即吟曰、即今依美耳就身好、不聽塵言

只談也。

日 僕每下坂亦休設酒肴、欲其僕後忘年之交、
且為人以僕為可畏、彼亦一個之甚難僕

山室阿蘇中平

三 小竹只是俗儒、為松籠罩得賢契、

日 蘇翁(翁不)常以逸史為使史、真有識之

言也、嗚呼、竹山之著此者、遠矣、其於萬代後

軒通語勝遠史、遠矣、其意何

僕先刻議論、事涉南代、頭ときえんハセぬ

か、此と云頭きえんハセぬ、固其所也、若くは

賢契所為音男子、即此可見矣、出明托保身

三
僕ハヨキことハ勿論、ありき事も海人の上には居
ることとまきぶが、僕を呼んで無邊のジメラウア
といふものあり、僕は之を喜ぶ、因自稱遊過
ふ、今又おちのさうあり、世にせまき事あり
僕に比するもの不可有也、ん世に狭きことの
才一也、らつらんわ一の字を思ひ表れん心に
喜溢す面

先年表勤にあり、僕の如きあり人打寄の余に不
良道下のグシヨウ也とす、外の二人然らば
シヨウ競するべしと云、僕曰、あつちおとす

由候

評曰、才鋒可也、不圓ぬ人物此地を誇

グセウといへど、夜敵の働は、弟人に超え、蓋概

然有五馬江南才一輩之氣、是使宋高宗騰る

魂奪、可怖也、夫れ、以、其、を、其、の、為、婿、也

ふ、胸、い、え、と、馬、の、件、い、と、云、然、亦、未、審

然ハ僕ハ大物カ

陳仲子とい大者、此人胸間の物でつらんおやあひ

石のありしとある子と聞か

必然こ、
凡若子の文
朱子常言云

文章の巨制と云ふは、いふも

山陽教書四林洞の大湯物と云ふは、林洞大忍
自畫湯物（此方圖あり）山陽先生以余
湯物為大拙者陰莖偉也と云ふは、山陽の
贈る畫二山田の谷在生曰、是、猶國ひある
う、原亦大鳥、一産大天、洞、是、文人花也
この筆跡ハ、よくし、まろし、まろし、す、バ、七、し
人、投宿も、なる年の、後、文、席、從、祀、の、坊、と、も
る、ん、と、再、ま、と、憶、き、候
主人いふ快活、断、七、この、雲、手

主人亦一個不立文章の英雄

妖傑等亦不圖、由、断、る、ま、手

ま、い、と、い、由、め、の、出、来、ぬ、人

二先生に、つ、ま、り、し、何、れ、恐、る、心、け、ん

始、竟、立、文、字、不、如、主、馬

才、見、一、主、馬、後、得、之、果、然、見、今、之、亦、慶、也

有

子、心、無、耳、而、通、る、指、如、也、偽、使、之、有、耳、則、其
後、又、甚、於、主、僕、常、與、賴、後、二、中、言

節百駮甚

人：後註の二字を以て若きと看破すも亦不用
可し。即僕是也。七一節百の駮註ハ僕二百倍
故書中而切倍之蓋也。

……

元：河合馬と云人ある

信長も亦さきこゑみへて信長記に云ふ此馬を
入らうといふことありあり

今見の馬好道下の馬好譲り合せし候
僕前年和歌山より帰つて此馬一匹きつとあり

ふつ、ふつと馬きこゑをうたへる也

一物のきつつかるんが仕合

僕自十七八歳也三都及佐州幸全一物者
以長青後馬也

……

予正胸花萬巻人以為其容貌雄傑而婢奸
如虎の子不稱其人、真儒中張子居方矣

撤尿張子居方

何のハ君のやうなうの馬の米んことを恐る
すことい自ら心も福也

小井の美男子も亦所人風也

……

敬翁嘗謂僕曰余の時極青梅、菖蒲子、
女るとと夫物にさう、茶屋をいひ、
いふ、余何故といふ、菖蒲子曰、女の時直主ハ
正取の人をいふ、此といふ、大松の安か来
る、とあつて、うこ申す由

此後酒間毎、君人言之、其痴不可及
如兄か、こすき、無比の款、

……

僕常以近松門左衛門為本相太史公、此論
奇甚

節節更欲執鞭于近松氏、人皆笑之怪、

……

昨夜日長談坊得主人夫婦幹事、宜首謝之

偶得二句

古人彙疏誰能并、白眼看他早起人

子心垢海内英雄固有理、而今垢主夫婦幹

事怪、然則未免為尋常人歎

君則真毫無垢心

僕則飽華洛在人不加君之田舍漢
吾天時為孔夫子所誤

敬而年平餘の時、一日奥方をわし、通る離
縁状を贈る奥方并媒不親其故、往問於敬
公、公曰、此有他故、余近年色をひけり
まわしめ候得共、所物はか、凡人情不論、
帝女花、以男世之文、為樂、所以情彼断、
離縁也、奥方并媒大に笑て遂に帰縁に在り
也

履新此茶奉時を禽獸に比し、多相延を大切におもふ
志可志見也

履新得意の時ありをわしめ、呼めりせあり、常運
文とあり、得意のことあり、直ちを文としをひきき
庭にあり、茶飲をもこたふり酒を飲、例のあり
をわしめ、呼め、書生兄之大に笑ひ、由
履新上下と着けり者をも呼ひ、お披露杯を飲、
酒毎の三杯、以三杯為度、此冬日兄其杯三合は
禮ハイリ

人喜也

此の如くは一つの工づらう由一口酒を山持に曰故宛
大きくうらたふあといふ得者、後軒曰、是、私
の字詞の工づらうといふ由

人託翁を笑問するが家来に為めよ、おん曰意
也といふ由

使後軒立世別誰者子正之別後、北面稱孝
平、めり

断、不称孝子

僕則断に称孝子、是下子正一書、

是、本仙洞常謂神醫太田備後守曰、是、此

の者の名なり、後軒の如ぬそうきと流あり、後

軒又是を曰、詔賜不素、こゝろは徳不揮也、

其後流美竹也、行も出を頼む、は、此

をを以て流、由、大田兼、中井子孫為傳

道、め、是、世、万、所、不、傳

以上兼流中より抽出、谷森二儒の著述の三山の

遺稿に存するもの二あり、一の愛静後、著、流、一、二

家業、流、と、署、し、あり、流、字、に、似、み、七、十、有、也、あり

不、い、の、もの、あり、流、に、同、名、各、体、の、文、に、類、味、あり、以上

小傳之巨典を成し、一端を抄録し、その又、谷三山湯谷
の人をいふも、氣味敢て、命を以て徳を以て、年長丈、性
と、節者の、務めを成す、ものあり、併、賸守る、もの
聞する、もの一、あり、三山、生、取ら、す、もの、而、して、徳を
成す、に、関する、訣、法、あり、爰、語、終、に、葉、氏、の、名、也
主人、夫婦、と、ある、葉、山、夫婦、と、ある、もの、三山、高、取、者
主、持、村、民、の、宿、河、等、幕、末、時、に、實、の、し、ま、成、す
る、もの、あり、か、ら、う、と、ある、

五月廿六日記

○後、世、の、徳、を、以、て、一、書、を、出、さん、と、する、もの、(き)、余、は、徳
川、節、の、説、加、村、民、と、ある、其、一、に、教、化、上、の、こと、を、

據、節、執、業、と、せん、とし、執、心、を、賜、あ、お、を、立、ち、見、れ
大、要、左、の、如、く、い、ある、

六月廿六日記

徳川期のの、夜、か、社、の、教、育、の、あり、る、感、化、を、其、く、す

二、千、一、

(1) 北河野と付、て、い、見、つ、徳川期のの、夜、の、流、筆、
を、説、く、が、明、居、り、也、

(2) 尚、ほ、い、ま、も、い、ま、も、徳川期のの、教、育、
の、あり、る、もの、を、い、つ、つ、を、傳、は、さ、す、を、得、ぬ

(3) 尚、ほ、河、野、の、範、圍、を、定、め、る、為、要、が、あ、る、也

社会と云ふのは中流以下に就てを主たる範圍
としていふのである

(4) 徳川期の教育と云ふのは時を依りていへば
ある日けんとし、初期の早い頃の別として一
般の教育としての子居て業を教へ
日用の事の上の進ぶだけ程度で、家庭教
育も同じ扱ふことであつた、所人と云ふ相
當の高級教育を受けたいものがあるが、
あつた、少くも、算術を除いては

(5) 日常用事と進ぶだけの先達による教育を受

けは其の以外の教育と云ふのは実験や園
園や年輩と云ふ得たよび、所謂社
會教育が餘程の力を多しといふのである
(6) 何れ此の社會教育の大切な核である
ことといふは、多くの平易な漢文がある
つに就中一小説がある、此の小説に添加しては
活世傳である

(7) 小説の沿革は他の篇にあるから、復すは略
すゝた、是より七校めてガット云い、
このことがあつた、徳川初期より、
版本

が多く無つた。説の類は多く書いた。あつた
は、後七土佐や狩野流の筆、むかしのあつた
おとぎや子其他今も残つてゐるが、如斯き
ことの一般に行つた。あつた。あつた。あつた。
後宮の娯楽のよゝあつた。あつた。

(8) 慶長頃、流字母本を出すことが行は
れた。あつた。あつた。あつた。あつた。
識用の圖書のあつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。

(9) 中流以下に度り、或る種の栞回書の流布
する。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。

あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。

此丁が喜んば見ればよきある、追々と純粋な兒
 用の本を出せば、小兒の故に始めて有物用開
 以來古物を手に入するの權利を得たのである
 (10) 小説の形式の如何に拘らず、娛樂本位であ
 るから繪が追加された小兒物の詞の或人と無
 く繪が本位にあるのは、最初無論繪も切替
 てあつたが、繪が大切であつた、讀者の繪を引
 つけて讀む氣も起り、最初から繪を珍
 重した

(11) 文張り次第から市物がある達するの心、寛永

頃、生んば井原西條、高雲の淵、葛原大次
 三松と商人を中心とする小説を書き初められ
 又當時武士道がさぶの成る心あつた時、あ
 つたから武道の小説、人間の本能性、起つて聞
 するものが勃然として起つた、是ら切替
 のものがある、小説が一躍面目を大いに一新
 した、文流を改む其不自笑するものが續き起
 つた、併し繪の文合のものも無つた、後年のこと
 く、毎紙挿繪がある、換るもの、少かつた、志
 かし、此等の小説は、當時の社會の如何なる感

化を興く、商人や武士や好色家の娛樂の爲に
のちうきを式何自家教育の爲に珍重し
此種があつた、従前、多く貴族の家庭にハ
扱ふもの多かつたが、後、初めに平民の實生活
に觸れ、此等、小説が此の如き、其の大
の感化を興く、此の七、儒教の如き、保し、まじ
此種、の分布、の廣く、無つた、一つ、の印、稱、を
讀者、の、高、か、こ、き、も、し、た、か、ら、な、り、

(12) 是から江戸の夜の大なる、夜長があつた、全
部、修、名、考、きの、草、紙、双、紙、や、言、文、一、致、体、の

こやし本、兼、表、（？）ニヤリ本、らむか、成、見、の、出
た、と、し、た、な、双、魚、の、毎、紙、潤、澤、に、揮、毫、が
あつた、ま、ん、か、ハ、ノ、ラ、マ、の、扱、に、連、亘、す、る、の、を
形式、と、し、半、む、婦、女、子、も、無、教、育、者、も、讀、み
得、た、の、を、え、ん、か、成、見、に、流、布、し、た、コ、ニ、ヤ、リ
本、や、西、屋、本、の、江、戸、の、花、柳、を、言、し、た、の、が、
田、舎、も、多、く、及、ハ、さ、う、つ、た、と、あ、ら、う、け、は、
言、文、一、致、の、一、体、の、話、と、端、を、と、ら、し、た、

(13) 此頃の小説は娛樂本意と云ふべき、忠孝
帰道武勇神佛を説く、聞するもののみ

の筋を取つて、後こそきや説の筋を元と割
こ上げ、其挿巻も七或る時代を除く外は
いとも芝居の感化を多け、人物を徹極と
羨し、其の態、面白い事、其のそんご家つたあ
が十の八九を占めてゐる。字、字、本任の挿巻
ハ、いんげん、濁りてゐるが、芝居と象つた文
字、又、美化してゐる。あつたといふ
小説の長きには、その長きを、見れば、その
流世情のあつた、流世情を挿巻と、いふ、初め
ハ、説の長く、文字は、あつた、挿巻、乾燥を

筋、油節杖があつたのが、後者を引きつけ、
よめ、何字挿巻があつたの、一番初め、い付
いれ、よめ、書体が多々、受えと、いふ、挿巻
が多々、且つ、物が多けん、ハ、いふ、奴と考へ、終、こ
文章、ハ、いふ、多々、挿巻を見ん、ハ、大体、ハ、いふ、
の、程、毎、頁、挿巻を入ん、草、奴、いふ、の、こと、とき、を
挿巻、ハ、いふ、中、心、ハ、いふ、詞、者、ハ、いふ、活、ハ、いふ、の、こと、である
かの、如、き、観、を、望、ハ、いふ、あ、時、毎、頁、者、の、見、後
ハ、いふ、流、世、情、家、ハ、いふ、も、高、ハ、いふ、画、工、を、以、つ、て、職
二、日、板、ハ、いふ、思、つ、た、人、ハ、いふ、あ、つ、た、が、北、海、の、こと、とき、

ハ心若て屈して居らざらんは、事實小説の行
いれり。画びきりたる文章は、是れ此の
ハ何時に於て七の格同くある、今日の無倫揮
画と重きを置き、詞者ハアラズ七分なりし
物語のことも文章を切り去る、このすべから
位だか、あつたに於て、名讀者の心理の或る画
に、寧ろ重きを置き、是れは、あらうと思ふ。言
情の感化も、文章の感化も、七遠らん大なる
そのかある、いくら名文でも、讀みんば多く忘
れらる、か一旦、眼、感、興を覚へれば、

終生、腦底に印して消滅しない。

(17)

當時に心家の名譽に眩惑し地位の卑かつた
浮世情画家の劣を多しと思はる、思はる、こつ
た、こつた、か、画家の劣は、確る、心家以上であ
るの、心、心家の文を綴る、を、音、く、一板、二
枚の、者、け、か、画家の心、見え、無、権、心、を
この、心、こ、ま、い、か、何、も、織、細、に、業、を、つ、け、の、
ひ、き、つ、く、空、易、の、こ、ま、ひ、き、つ、つ、に、心、若、を
自家の都立の、結、き、り、を、押、ふ、の、心、か
画家の、女、の、詞、を、画、に、あ、ら、う、に、描、か、る、か、

此家の注文が七面倒びあつた後、亦もさ
せんとし、そして若双家の如きハ心家の
者、丈の頁数と同じ敷を有かき、ゆゑ
その譯ハあるか、ハ心家の百の著書か
ハ画家も百の著書かある譯ハ、其の甚
心の多きとも心家、三倍乃至五倍するの
て、あると考へ、この心を中びあつた、ハ夜の太
い、行んば、七の感化の大、あつた譯ハ
此の画家の考へ、依るよと謂ハ、ゆゑ、
波著、ハあ時の縁の下、の力持びあつた、

禁忌部類

春書画の
巻

(18)

とか今ハ誰ん七の体、まの、感する、
小説の海布とせ、浮世傳も、感ん、世の秋、
受け、小説、ま、と、世傳を、欠く、可
き、ま、ま、ま、ま、即ち、其の、例、
七、是所、圓念、ま、か、感ん、に出た、か、皆、
寄、ま、揮、傳、か、あ、ま、ま、か、呼、心、拍、ま、
つ、ま、ま、海、布、七、し、地、理、智、深、か、ま、
廣、か、つ、狂、歌、の、集、は、多、く、ハ、浮、世、傳、か、揮、
入、ま、ま、本、風、俗、ハ、聞、ま、ま、の、か、い、ま、
傳、を、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

禁忌
年中行

随筆
北の書譜
揚南侯
の書譜

る人二首ニ擬
し、
し、
し、

浮世橋が二冊に
なるの文致

(19)

浮世橋
五十三次

彩色と格
の別達

通称日本
の太史公

民衆音楽

よめが北斎画重文他の手に入ると成り、
以上の冊子の体を作り、これを三枚
つきに内紙を一枚つ、きの錦帯の盛んに出
ルこと云ふ、おもしろい、以後橋もあつて後
者も後もあつた、まんが江戸の大さう、
おの江戸橋と唱へて、田舎の人の由く
り出さるゝを、持て、演劇と浮世橋
といふ、密着の關係があり、浄瑠璃の中
に浮世橋が挿まらん、脚本や甚だしくも
挿まらん、説回換に流布した

(20)

木村黙庵の
小説

小説の刊
行の布

四女書

春の物語

元平馬 藤原
程彦 田原源次

馬琴 小文治

以上多方面の刊行物の内、あるは階級を
通してのものがあつた、當初の中流以下の民衆
を目的として、此のよめが、あつた、追々
士君子が、小説讀書と稱する、換は、
多く出て、徳川の世の、浮世橋よめ
ハ全盛であつた、それが、社會教育
の筆化を、幫助する、力のあつた、よめ、浮世
橋、あつた、浮世橋ハ民衆藝術の、開
か、歓迎した、浮世橋こそ、ナシヨナル、

(22)

芝居の脚本は能書より變遷を以て元を
流す(1)る(2)國舞台に流すものありから
隨て其の社名も及ぼりて感化の一層力
があらむことハ(3)す(4)る(5)の(6)此(7)方(8)而(9)も
近松門左の如き不世出の氏大天才かあ
らん、此海者や竹田出雲が如き出(10)し(11)
漢多畑の森田昂るも其文(12)に服
して日本の太史公ハ近松比と云ふこと
ハ比

(23)

小説の格式に倣ふ(1)情(2)を(3)加(4)へ(5)て(6)刊(7)行(8)す(9)る(10)こと
多(11)し、此(12)の(13)式(14)に(15)據(16)る(17)こと(18)ハ(19)す(20)く(21)て(22)観(23)念(24)を(25)受(26)け
比(27)為(28)り(29)し(30)て(31)小説(32)以(33)外(34)る(35)こと(36)ハ、事(37)業(38)定(39)ま(40)る(41)こと
有(42)益(43)なる(44)もの(45)多(46)く(47)出(48)た(49)こと(50)ハ、直接(51)社(52)名
を(53)教(54)育(55)する(56)こと(57)ハ、大(58)切(59)なる(60)もの(61)ハ、あ(62)つ(63)た(64)か(65)ら、其(66)法
り(67)ハ、小説(68)流(69)行(70)の(71)故(72)波(73)、更(74)も(75)恣(76)しく(77)云(78)へ(79)ハ
俗(80)世(81)傳(82)の(83)伴(84)ふ(85)た(86)お(87)産(88)む(89)あ(90)る(91)こと(92)ハ、入(93)る(94)べき(95)に
あ(96)ら(97)ず、此(98)の(99)部(100)類(101)に(102)属(103)する(104)こと(105)ハ、冬(106)粒(107)の
ぬ(108)所(109)圓(110)な(111)り(112)て(113)北(114)極(115)雪(116)雫(117)の(118)こと(119)も(120)き(121)り(122)し(123)て
換(124)り(125)し(126)る(127)や、年(128)中(129)行(130)事(131)の(132)類(133)や、訓(134)素

大奥を穿しにまわらる。唯以て大奥や大名
の生活と真穿しにむかうはさうく其の缺陷
も美とまじく穿するものなり。美草が平
民の擡頭、式許かの種を時はいかにい
やういぬ。伊斯の皮肉なるもの、方の時
忌諱に觸れて是行の禁も止や逮捕の危
に罹つにまわらるるもの、火災をいかに御
代の花と書かぬもの、さういふに、幕屋
歴々時代、これ自然諷刺文なるを感
し起らざるを得ざるものなり。諷刺の文は斯

の時代に起るものなり。禁を犯し追の上
階級の缺陷を冷笑してやがて、平民擡
頭の動も氣合を促つた。無論高侍階級
にありて漢字者の没落^帝と嘲罵し
て洒落本をいふ。此花のまわらるるもの
も、彼れ等、如斯くも氣を吐いた。屈辱
の懊惱に堪へざるものなり。や、脱衣者
ありしを、美に倣つて氣を吐いた
故に、毎年の心算が多くなり、出ても
僅心とある。而初、娯樂をまじりに、

遊に上昂上し時勢を論し政治を論し
階級制を破壊せんといふまは入道
人だことを考へると世説の社会を及ぼ
し此方の實に偉大である

五月廿八日記畢

○三村竹海を引きたるの集古雜傳に明和八年京都
士林公儀の禁書令に七とつゝ士林書の心得のせん
に海に目録が載せしめんとしと士林書の程
類がおよそ三つあり、才一異政考、才二豊臣氏論
才三書才三徳門軍家訓才四大名の御家

騷動に因りて、才五備書(先代の事本紀の類)才六
淫根淫聞に因りて書才七朝廷の儀式に因りて書(大
常の儀集の類)等

禁書目録

中泥子贈

てあることか知らぬ、幸
死書名をえんべ何れ忘
あつたの疑ひのあつたもの
あつたが、真いぬる書名
て中にも諷刺のあるもの
凡俗を壊れするもの

記すあるものかあること
と推せざるを得ぬ

古來御制禁の唐本和書並に絶板賣買停止之書其外秘
録浮説等之寫本好色本之類は片紙小冊たりといへ共
かりにも取扱ふべからず常に相愼堅く法令を相守る
べき旨毎歲正五九月書肆會集の砌ねんころに是を戒
めおくといへとも書目數多の事なれば一々記憶し難
く或は忘却し或は意得たかひも是あるべし依之今般
右之書目古來より傳聞記録する所大抵其類を分てこ
れを記し印刻して小冊となし書肆家々に附與し人々
常にこれを點檢していさゝか疎略之誤りなからん事
を願ふもの也然りと雖述作の限なき見聞の廣からざ
る此書の載する所或は遺脱過誤あらんも計り難し是
を覽る人其遺たるを補ひ誤れるを正したまはん事偏
に是を冀ふもの也

明和八年辛亥五月
京師書林團
貞享乙丑年南京船持渡唐本國禁耶蘇書

目録

天學初函 幾何源本 職方外記 萬物真源
彌撒祭義 聖記百言 唐景教碑附 簡平儀說記
西學風 代疑編 同文算指 表度說
靈言蠶句 十慰 渾蓋通憲門記 崎人
濼罪正記 天文秘略 天主實義 同續
計開 參泰西永法 二十五言 明量法義
七克 辨學遺牘 三山論學記 罔容較義
勺股義 交友論 教要解略 況義
濼平儀記 奇々圖說 福建通志 寰有詮
地緯 關邪集
已上三十八部一説表度説福建通志地説關邪集右四
品ヲ除キ門記圖説帝京景物略八册 已上三十六部云

松平系圖 慶長記 武家盛衰記 天草一戰記
三河記 同真字 日光郡鄂枕 松平開崇開運録
關原記 同大全 慶元通鑑 三河後風土記
關原雜話 岡崎物語 玉的曝顯 越後通夜物語
同侍騷記 家忠日記 駿府政事記 由井根元記
大阪記 由井實録 慶長治亂記 東照宮御遺訓
德河記 龜卜書 東照御縁起 武邊咄聞書
的露叢 主圖合結 赤城紀談 義子文通
赤城盟傳 西山紀聞 新撰大石記 赤穂忠臣記
介石記 同追加 寺阪之覺書 忠士絶纓書
介淺記 寺灯私記 武家明鏡集 慶元冬夏軍記
蓬窓紀談 復讐物語 易水漁杖集 山科之聞書
忠義碑文 忠士筆記 膽心精義傳 中興續盛衰記
露滴集 鍾秀記 武家拾要記 難波戰記後編
義人録 槿花集 慶安太平記 武家隱見録
岩淵物語 元寛日記 武家嚴刻録 明和石曲傳
仙臺萩 秋田杉 諸家大秘録 阿淡夢物語數品
浮田物語 松山實録 見語大明撰 山内幸内風呂敷包
殺法轉輪 山鳥記 切支丹實記 明和飛日記
鳥原實録 政安實録 井伊家傳記 板倉政要實録
郡上騷動 嚴秘鐵 嚴秘此比噂 宇都宮金清水

本朝通鑑 萬天寶録 文露叢 先代舊事本記
柳營秘鑑 同續 武德大成 玉露叢 四十卷
寬明日記 東榮日録 異考大通記 甘露叢 八十卷
豊臣實録 御年譜 御年譜附尾 同泰政録
泊華軍記 豊臣記 扶桑早聞私義 日本中興治亂記
島原記 黍頼事記 難波戰記數品 新撰豊臣實録
國中實録 松平記 武德安民記 市照創業記者異

建武年中行中略解 徂徠先生可成談 半紙本三册片カナ書
金銀割合重寶記 夜國繪 精忠傳 艸書十體千字文
大嘗會便蒙 斥非扁牛紙本ノ方
賈買停止並仲間裁記

禁庭 將軍家の御事はいふに及はず堂上方武家方近
來の事を記したる書者右目錄にのせすと雖堅く取
扱ふべからず其外世上浮説にても書體よろしから
ざる書是亦右に准すべし此段人々よく勘辨あ
るべき事也

笑今川 風流東海硯 都獨案内 花柳巖柳島
福引寶繪合同役者繪合 歌曲色紙山 繪本此手柏
素人板並他國板賣斷有之部
大般若經 嵯峨板 花道全書 正信偈文軌 指要鈔撰翼
神代卷藻 藻草 天時占候 野山名靈集 唐詩句解
唐詩選堂故 同辨書律詩排律絕句 同解雋 四家雋
唐詩選江戶板 易古注江戶板 詩經古註江戶板
增註孔子家語江戶板 楚辭王注江戶板

絶板之部
先代舊事本紀植字板 同板本 禮綱本紀 聖皇本紀
聖德太子五憲法 同頭書 日本記事 天王寺法事記
案内者 石田軍記 申國太平記 神宮秘傳問答
九州記 辨天秘訣 日本人物史 百人女郎品定
色傳授 天滿宮傳記 五帖目御文章 同半紙平かな
至公訓 湯部以知吾 櫻曾我女時宗 野呂口三味線
太平義臣傳 好色本 享保八年停止 忠義太平記大全
高名太平記 太平義臣記 新撰基經 忠臣略太平記
將棋勇十鑑 同手段草 温知政要 六祖檀經 舐糖
死出田分言 三部經 橋溪師改點 茶經字寶實鑑
倭文澤曆草 忠臣金知冊 本迹雪誘 十種香暗部山

淺草の仲世見は百四十七月かりては百十四名一人にて二三月借リ
たるもあなり東側は西日を受くるとて坪七圓五十錢西側は八圓
五十錢にて市より借り受く大抵一月二坪五合すみては大かた舊く
よりすみなれし人のみなれば譲り受くるには東側にて一萬二三千
圓西側にて一萬五六千圓但し地震前の話とぞ

越後騷動 西山遺事 姫路騷動
二壺集 本朝色鑑 望遠雜錄
右載する所の外開書雜錄等の寫本數多これ有べし
と雖一々記すに暇あらずすべし

京師書林印行
明和八歳辛卯仲夏日

○事實の真相のそとに谷三山と木村田部等の
筆蹟や左の一派を載す。後者の即首也。戦國
時代饑餓の折柄より動物の本能を極端にあら
す此般のことも徳無といふに難い。何となく獨逸あ
らうの流をやくの思がある。 五月十日録

大改夏陣の役、人の名を忘る。戦い看るることの外
空腹より一歩も引くことを得ず、刀を杖に突し
まじり、足も重く、木かけに一人休長き。此後、こゝに
うなんことさへ、敵か味方が不詳、先づ兵糧を乞
んと、まう乞ふ。後士流變の色も今つのみ仕舞、あ

一七ありと云けんが、よきひまを伺、刀に休息の士
を切り、すくに古物のあやうを切刻、腹中の食糧
をつまみ出し、食しとさう、出来さうことさう。

○若し木改の圖を刻する時代、如何に筆工が多たか
あつたか、略々想像せん。字字生も多く需用があつたま
ま、延の場、温故を大に考つたよ、大む、あう、無つた
多く、讀本の未だもむ、つう、く、し、お、む、の、糊、の、紙
を、其、の、く、は、見、標、用、し、と、傳、く、を、あ、う、あ、し、版、下、書
ハ、字、字、生、と、い、お、り、か、い、ら、う、お、あ、い、あ、い、と、一、体、の、あ、い
あ、い、あ、い、無、ん、か、い、ら、う、あ、い、あ、い、唯、な、書、を、よ、く、あ、い、と

いふたの版下り

洞梅録

明朝と云ふ書風は初は唐本風なりしが嘉永の頃源藏明朝と云ふが起り、源藏といふ人二人あり、一人は渡邊源藏とて醫學館に出でたり、家は瀬戸物町、經節問屋イのうしろと聞く、此の人筆耕のときは拙く見ゆれどほり上げては非常にひきたちて見えし、中島文平此の書風を繼承す。一人は森源藏とて細川家の臣也、此の人は筆耕のときは善くほりては左程に非ずとぞ。此の後佐太郎明朝行はる、森谷佐太郎と云ふ彫師の創めしものにて、この風は津の守坂下、蓮池に住める松久条藏傳へたり。川村明朝は川村某の創案にて、入谷の

安井臺助此の風を彫る、安井の悴川田彌太郎も亦明朝ほり也。又清八さんの明朝と云ふは篠原清八明朝彫にて此の人の風を云ふ。先代安田六左衛門(天神山といひ平河町住なり筆耕彫りにて群書類聚も此の人の手に成りし由)の子なり此の外に酒井勝太郎、龜井戸の傘さんなど皆明朝彫りをなせりと云ふ。生田可久君談

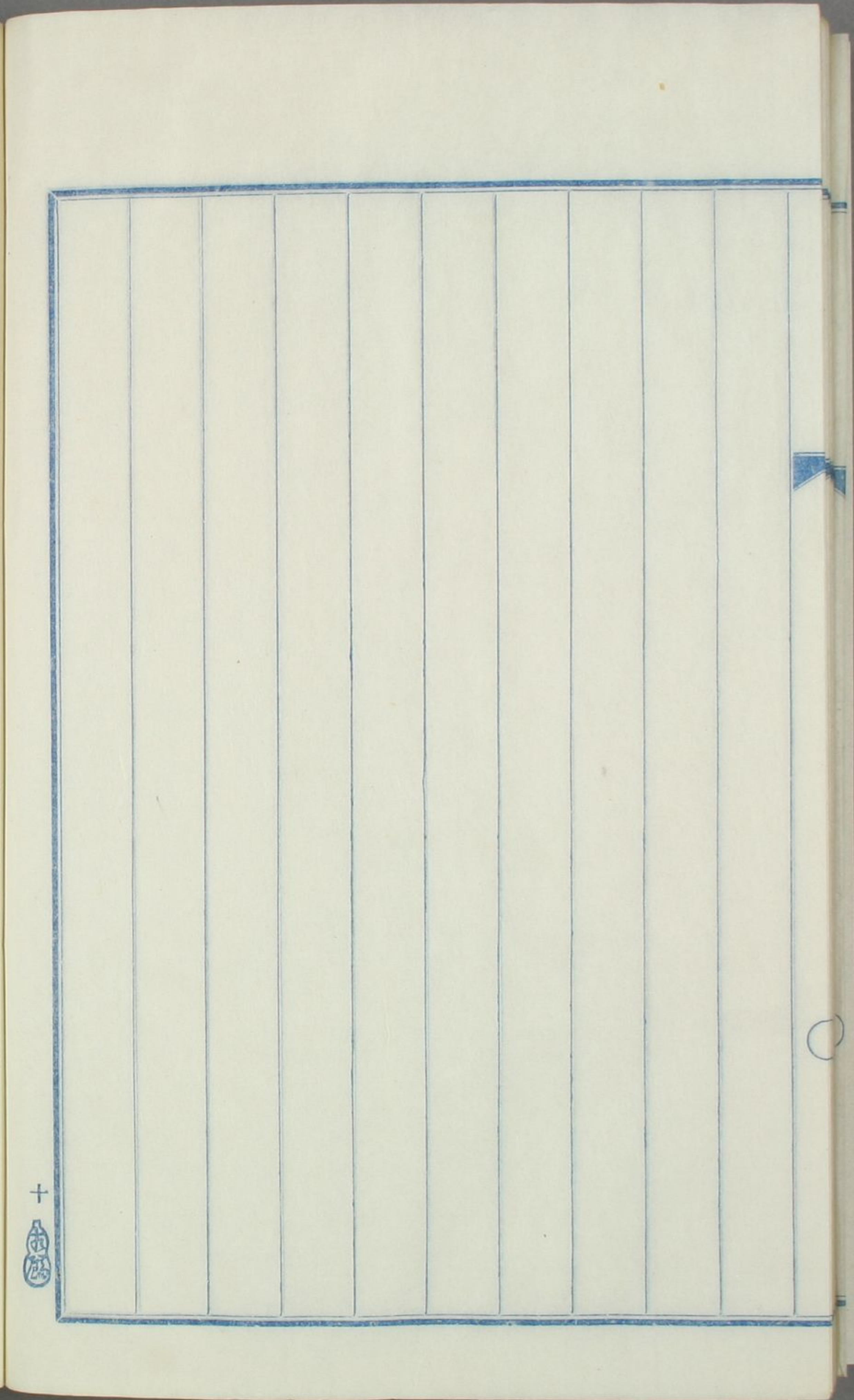
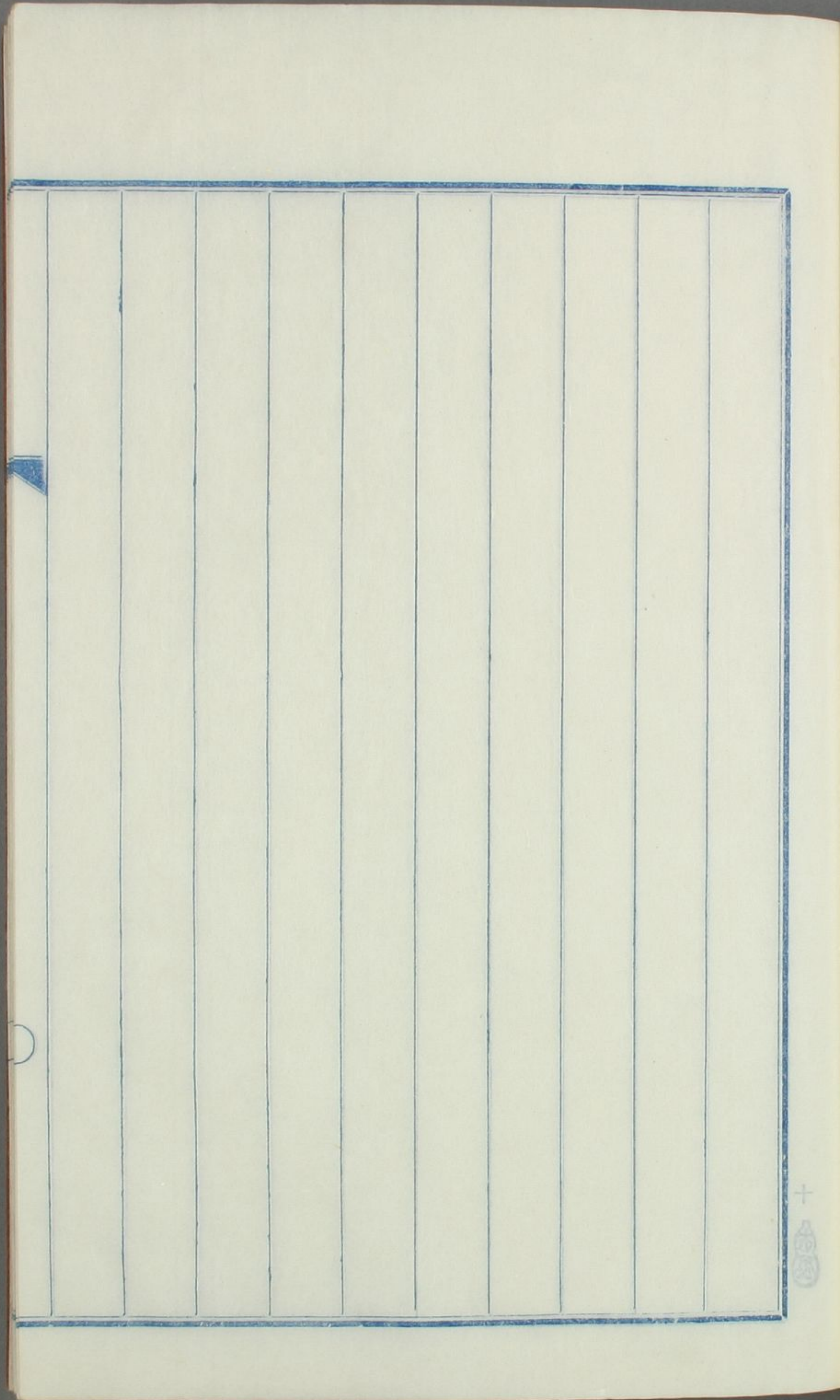
い書家とては職工に近ひ扱ふよむ
あまう名をいひの七傳りつて
まゝ、深世傳の筆者の名へ傳りつ
てあるか版下業工の絶對に傳
はつてあるをいひ職工してゐる

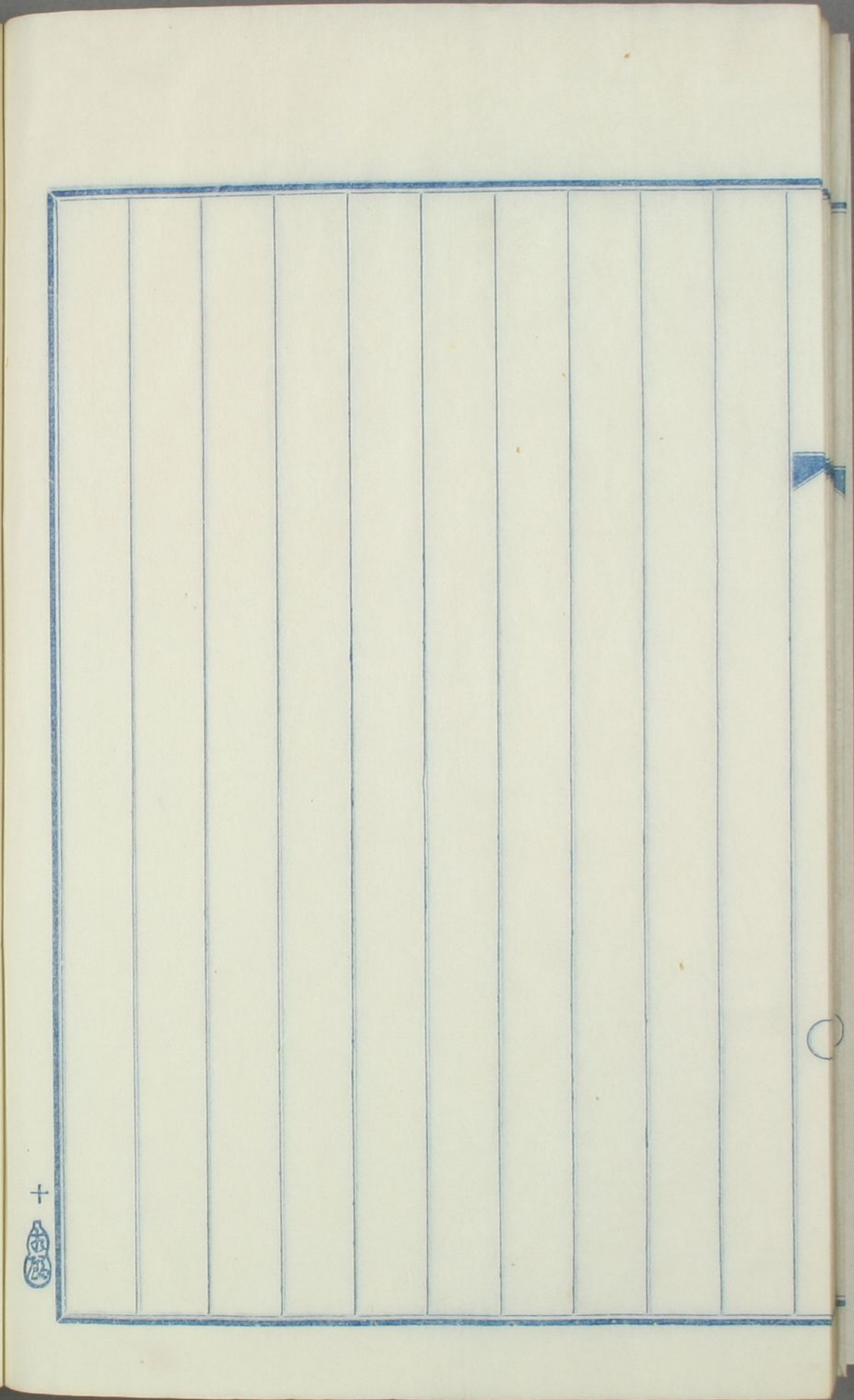
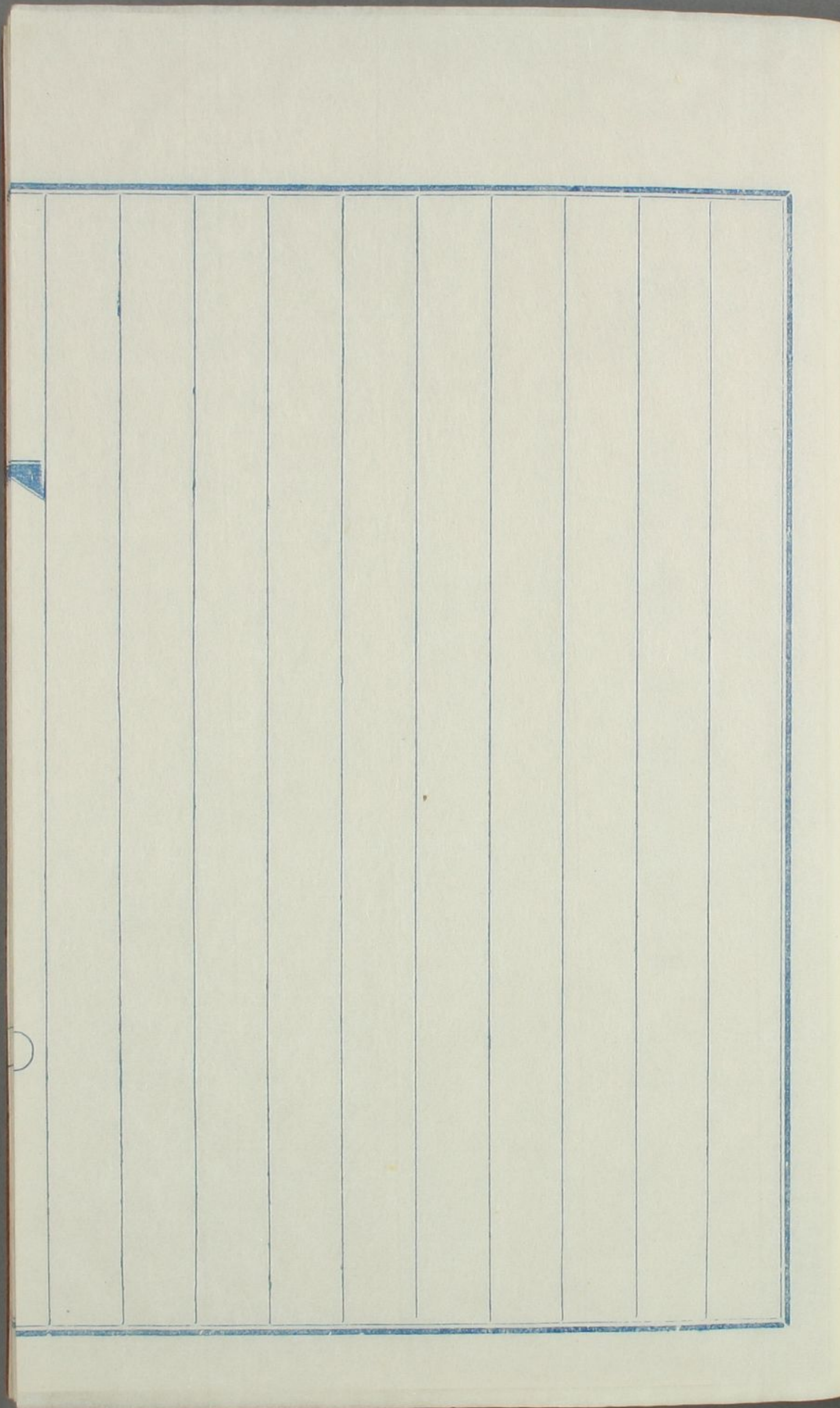
おれあかし随分名人あつたに相違ない今集古に
録し記さす初め二三の名を記すことか出来
れ三十事の後うたを多く湮滅の傳すも相違
ないから爰に切抜を存しおれ、此記すことか
相の書風が嘉永の頃から初まうのとある、是れ
本風とあるが、多の唐も風とある、宋版の書
の楷者が追々出たれ、志かし、どこにも四角張つて
ある字をさして、そのあつて、刻り河のたも、
このい此体のある、帆河の熟達、此のの、
置いと刀で其字を模刻し、此と云ふてある、

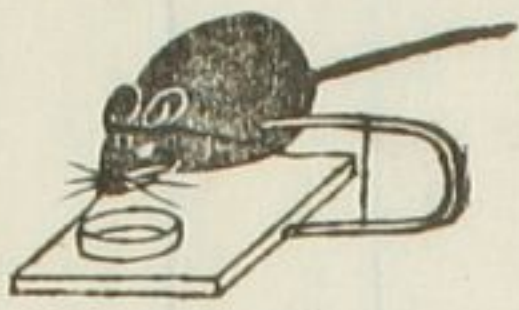
か者いそ一向に拙るゝか懐れに思ふべきよむ力と権と
と三洲あまの出来にむある。明朝といふのちわり軟か
味のあふ楷者と云ふのひある。自今ハ平生考へてある
が、菱湖の細楷が一時喜ばん。菱湖自身も身も文字
の版下を考へたのが、まこと美事であつた。此風
が流行し、菱湖の流んと汲む輩工が大いに用ひら
るゝことなるつて、かう日本の版本の面目が、かうり変
つた。別集も詩集の類にあら、此体の目版下を用ひた
らう。版下の一革命とせよ。あへま、いふと、自今
の考へもあるが、此切板を云々する。此朝業工のいふ

感化を受けたるものがある。か、直接考へたものも
ない。美のさうのが、版下と云ふ。飛揮とあるが、そ
の八拾五も肉葉の流世傳のが、彫る一層と云ふ。同じ
類の澤の、彫りのが、他種進んでゐる。此時代があるから
る。此を美化したるものがある。

五月十日記







集古 大正十三甲子

五月 發行

本邦新聞紙の濫觴に就て

朝倉無聲

去ぬる明治四十四年の春、「本邦新聞紙」を著述した時に、本邦新聞紙の權輿は、元治二年に横濱で創刊された「海外新聞」であること、曾て本間彦藏氏の談話を又聞きした事を思ひ起した。然るに、岸田吟香氏の「新聞實歴談」を見ると

予が新聞紙を刊行したるは、元治元年にして、之を刊行せんと企てたるは、嘗て横濱に在て、ドクトルヘボン氏と共に、和英對譯辭書を編纂する頃、ジョセフ彦といふ者と相往來したる時なり、此米人ジョセフ彦は播州の彦藏といへる漁師にして、十一歳の時米國に漂流し、米國の教育をも受けし人なり、嘉永六年ベルリの通辯を兼ねて來朝し、幕府は彦藏の爲に横濱に洋館を建て住はせたり、當時予はヘボン氏の家に在り、始て彦藏に逢ひ、それより屢往來して、外國の事情を質問し、又英語をも習ひたり、其頃遠州掛川の人にて本間彦藏といふ者、亦英語を修むる爲に横濱に在り、彦藏と相往來せり、一日彦藏予等に語りて曰く、米國には新聞紙といふものあり、専ら世間の珍らしき事及び日々の出來事を書き集め、之を世間に公布するなりと、予も嘗て新聞紙の有益を信じ居たるが、其刊行の方法等を知らざりしに、彦藏の勧めに

より、愈之を刊行せん事を思ひ立ち、即ち彦藏は西洋新聞を翻譯し、予と本間氏とは之を平かな交りの日本文に綴りたり、されど其頃は活字等は一切無ければ、予等自から版下を書きて木版に刻し、半紙五六枚にて單に新聞紙と名づけ、自から之を横濱市中に配達したり、これ元治元甲子の年にして、實にわが日本帝國に於ける新聞雜誌の元祖といふべし、

とある。兩氏とも同新聞の共同經營者でありながら、創刊年代のみか、新聞紙名まで異つてゐるのは、恐らく孰れかの記憶違ひであらうと思つて、當時其新聞を極力搜索したのであつたが、終に徒勞に歸してしまつた。で、止むを得ず岸田氏説——彦藏の漂流と來朝年代の誤記あるにも拘らず——を引用し、更に『日本新聞史』に據つて、元治元年四月横濱埋地百四十二番館發兌、同年六月發刊の事を附記して置いた。かく岸田氏説を採用したのは、前記の『實歴談』は同氏の執筆であるのに反して、本間氏説は又聞きであつたから、傳聞の誤りを恐れたが爲である。

芝居ならば此間十年相立申候とある所だが、一昨年の冬和久氏の賣立書籍中に、彦藏の新聞紙があるを聞いて、早速吉田書店へ注文を發した。夫と同時に横濱の曾我部一紅氏からも、同様の注文が同店へ着いたとの事である。幸にも同新聞の入札は、吉田書店の手に落ちたので、翌朝駈付けた時には、横濱から曾我部氏が既に店頭で快談してゐられたのには、實以て驚き入るの外なかつた。もとより同時の注文であるから、圖引きにしようといふ話も出たが、何しろ曾我部氏は斯道の蒐集では日本一であり、私はたゞ一通り調べて、拙著の誤を正しさへすればよいのであるから、權利を放棄する替り、同新聞を其場から借用するといふ事に相談一決した。そこで持歸つた新聞を取調べて見ると、傳聞の誤りを恐れてゐた本間氏説が正しく、岸田氏説は全く誤りである事を明かにした。

ジョセフ彦岸田本間三氏の共同經營した新聞紙名は、本間氏説の如く「海外新聞」で、元治二年三月横濱百四十一番から創刊されたものである。第一號の卷頭に

元治二年三月十三日、イギリス飛脚船此港に入りしを以て左の新聞を得たり、
とあり、卷末には

右の如く各國の新聞誌を日本の言葉になほし出す趣意は、各國の珍敷事をも知り、且物の價の相場高下をも辨へ知れば、貿易の爲に便利多きを思ひてなり、英國の飛脚船は一月に二ツ、は此港に來るものなれば便り有候度毎に速に出版す、尤も速なるを專一にする事なれば、檢校の暇もなき故、誤謬而已多して通じ難からん、且夫に童子の輩にも讀なん事を欲すれば、文章の雅俗を問はずして、唯元書の大意を撮とりて、話の如くなせしもの故、讀者幸に元書に就て論ずる事なかれ、又今よりしては、横濱在留の異人より出す引札等をも譯して添可申候敬白、百四十一番

とあつて、其記事はフランス事情プロ井セン國の部ロシア國の部オランダ國の部イタリヤ國の部イスパニヤ國の部ホルトガル國の部イギリス國の部アメリカ國の部に分類掲載してゐる。尤も外國新聞の翻譯のみで、本邦に關する記事は一行もないが、兎に角本邦に於ける民間發行新聞紙の濫觴をなすものである。

扱右の『海外新聞』は二冊に合綴されてゐるが、希代にも本間彦藏氏の舊藏本である。毎號の表紙は除かれて、卷中には號數の記載も無く、且中途で缺けてゐる所もあるが、大略左の通りである。

一丁より	元治二年三月十三日	十八丁より	慶應元年四月二十八日
六丁より	元治二年三月廿六日	廿三丁より	慶應元年五月十一日
十二丁より	同 年四月十二日	廿七丁より	同 年五月廿六日

卅二丁より	慶應元年閏五月十日	六十七丁より	慶應二年五月五日
卅五丁より	同年閏五月廿六日	七十三丁より	同年五月廿七日
卅八丁より	同年六月十五日	七十七丁より	同年六月廿二日
一丁より	同年七月十四日	九十一丁より	同年八月廿五日
五丁まで			
六十丁より	慶應二年四月十七日		

是では何號で廢刊したのか詳でないが、最後に綴込まれた九十六丁より百丁に至る五枚は、珍らしくも同新聞の原稿で、本間潜藏氏の自筆である。此原稿が上梓されてゐない所から、慶應二年八月二十五日號で廢刊した事が推知される。

かく一通り取調べた後横濱へ返送すると、右の中一丁より五丁に至る五枚は半端物であるから、紀念の爲にとて惠投せられた。それが識をなしたのもあるまいが、昨年九年の大震災火災の際、曾我部氏は奇禍にがゝられ、海外新聞の合綴二冊も亦灰燼になつてしまつた。かくて贈られた五葉の海外新聞は、思ひも奇らぬ悲しき紀念物となつたから、自から裏打表装した上、今猶篋底に秘藏しつつ、曾我部氏の冥福を祈つてゐるのである。



けふ海軍記念日に

軍縮——津輕爆沈さる

▽……弾丸に心ありてか。容易に命中せず

空と海から挟みうち

廿七日の海軍記念日を期して、津輕(津輕水雷敷設艦一七〇)ト(舊名ペロラダ露國公捕艦)を爆沈するといふので、津輕市はひつくりかへるやうな騒ぎである。海岸に面した山といふ山崖根といふ屋根はことごとく人の鈴なりである。朝来東京廣濟方面からくる見物人も列車の窓から飛び込むといふ。

大混雑

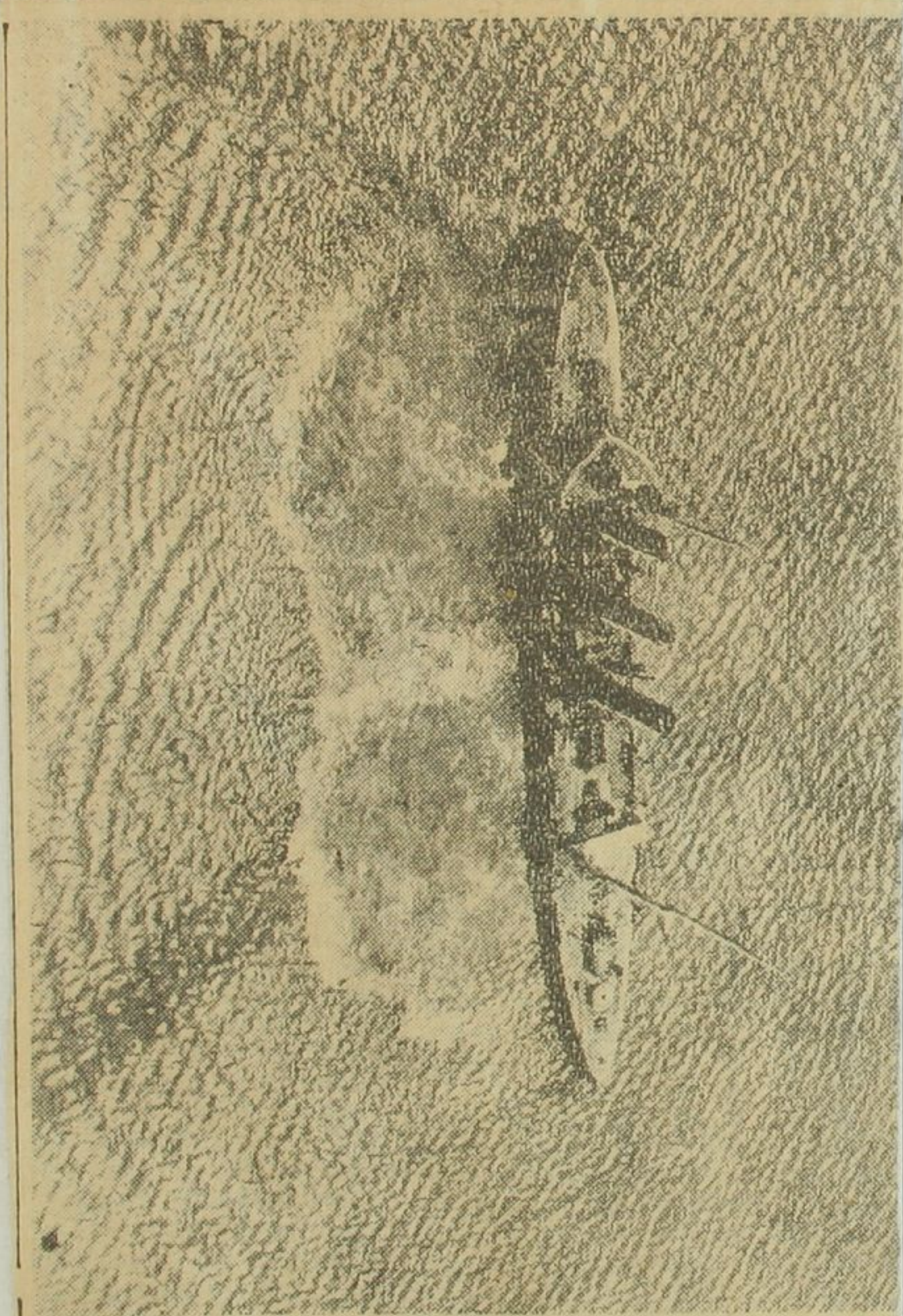
本、伏見各女王陛下お成をほしめ人出約五萬人に及び、餘興場にあてられた海兵團には萬國旗が張りまはされ、海軍音楽隊が絶えずさましい行進曲を奏してゐる。爆沈の犠牲に供せられる津輕は、すぐ目と鼻との先約十五町の沖に下す黒い船體を眺めたへる十時十五分になり、吉良大尉指揮の十年式飛行機六台、飛行艇一台が

航空隊

飛来し津輕目をかけて約二百メートルの高さから六個の練習用爆弾を投下したが風かひどいため一つもあたらず青い海面に水煙を上げ

拍手か

起ころ、その時、艦留氣球からは橋本少尉が落下傘で飛び降り、快技を演じ、拍手の内、猿島付近の海上に降り、次いで魚形水雷(無裝薬)が舊水雷艇から發射され海面に恐ろしい波を湧立たせながら津輕の前約百五十メートルにそれた。十一時十分、最後の機雷水雷艇の轟と、なり、艦が旋回の時、艦まで上がり、美事に津輕の止めを刺した。尚津輕は時價に見積つて約三百萬圓のもので、僅か三百圓足らずの魚雷の屠るところとなつた。是からは擱座した儘で防波堤の役目をして、永く横須賀灣に残る筈である。尙此の日學習院生徒三百名青年團在郷定人分會員約三千名の目撃があつた(横須賀發)



(飛行艇上から見た津輕利那の光景)

○軍縮の故
果渡艦を
くさる海城
をかく破
壊せぬを

の寶物をもとと海産
の埋めるるは前代未だ
のるるも、動切ある船の
艦を銃殺するは真忠

い難き、憐れむ記をも見
て果死すること久之矣



珍らしや

霧氣樓表はる

世の中に不思議なもの一つとして
 まだ目撃者が猶疑の念を抱いてゐる
 霧氣樓が昨日午後一時頃五智坊前に
 現はれた。それを事象見た瀧池の東
 西といふ人はあまり珍らしいので當
 一の傳説を次のやうに話された。
 一 傳説はきのふ午龍十一時頃家を出て
 瀧池の關川橋から約一丁ほど下で釣
 をしてゐました。ふと見ると北の方
 が暗くそして植込みの杜の間に又高
 い樹や低い樹が薄霧をとほして見
 やうにぼろりと見えました。私はあ
 まり不思議なので尙も附近を見廻は
 すと米山は雲にさへぎられて姿が
 えなかつたが瀧山の低いのは半腹
 は見えてその上にも矢張りさうした
 のが現はれてゐました。そこで私
 はこれが世の中云ふ霧氣樓なるも
 のであらうと思つて關川橋の堤の
 へあがつたらそれが五智の坊前まで
 續いて見えました。その樹と樹との
 間がマバラになつてゐましたから折
 檻車を繞りて通りかゝつた二尺の

世の中に不思議なもの一つとして
 まだ目撃者が猶疑の念を抱いてゐる
 霧氣樓が昨日午後一時頃五智坊前に
 現はれた。それを事象見た瀧池の東
 西といふ人はあまり珍らしいので當
 一の傳説を次のやうに話された。
 一 傳説はきのふ午龍十一時頃家を出て
 瀧池の關川橋から約一丁ほど下で釣
 をしてゐました。ふと見ると北の方
 が暗くそして植込みの杜の間に又高
 い樹や低い樹が薄霧をとほして見
 やうにぼろりと見えました。私はあ
 まり不思議なので尙も附近を見廻は
 すと米山は雲にさへぎられて姿が
 えなかつたが瀧山の低いのは半腹
 は見えてその上にも矢張りさうした
 のが現はれてゐました。そこで私
 はこれが世の中云ふ霧氣樓なるも
 のであらうと思つて關川橋の堤の
 へあがつたらそれが五智の坊前まで
 續いて見えました。その樹と樹との
 間がマバラになつてゐましたから折
 檻車を繞りて通りかゝつた二尺の

古樂府孔雀東南飛

三石中十七句

一八七三四年

中書子

商子

德子

珍松

